文学部専修案内

京都大学文学部

令和 5（2023）年 7月

目　　次

1.　系および専修への分属について ……1

2.　哲学基礎文化学系 ……2
哲学専修 ……3
西洋哲学史専修 ……4
日本哲学史専修 ……5
倫理学専修 ……6
宗教学専修 ……7
キリスト教学専修 ……8
美学美術史学専修 ……9

3.　東洋文化学系 ……11
国語学国文学専修 ……12
中国語学中国文学専修 ……13
中国哲学史専修 ……14
インド古典学専修 ……15
仏教学専修 ……17

4.　西洋文化学系 ……18
西洋古典学専修 ……19
スラブ語学スラブ文学専修 ……20
ドイツ語学ドイツ文学専修 ……21
英語学英文学専修 ……22
アメリカ文学専修 ……23
フランス語学フランス文学専修 ……24
イタリア語学イタリア文学専修 ……25

5.　歴史基礎文化学系 ……26
日本史学専修 ……27
東洋史学専修 ……28
西南アジア史学専修 ……29
西洋史学専修 ……30
考古学専修 ……31

6.　行動･環境文化学系 ……32
心理学専修 ……33
言語学専修 ……34
社会学専修 ……35
地理学専修 ……36

7.　基礎現代文化学系 ……38
科学哲学科学史専修 ……39
メディア文化学専修 ……40
現代史学専修 ……41

（資料）系及び専修に関する内規 ……42

1. 系および専修への分属について

文学部の学生の皆さんは，それぞれが関心をもつ学問分野をより専門的に学習・研究していくために，2 回生進級時に「系」に，3 回生進級時に「専修」に分属することになります。

「専修」は，従来の「専攻」に相当し，各分野の学習・研究の基本単位を示しています。ちなみに，「専修」を運営する教員および学生の総体には「研究室」という名称が当てられています。たとえば，「哲学専修」に分属した学生は「哲学研究室」の教員の指導のもと「哲学研究室」の一員として「哲学専修」に定められる履修を行う，ということになります。

これらの専修を 6 つに大別して，より広い視野での学問的方向を示しているのが「系」です。系および専修への分属は，いずれも秋（1・2 回生（1 次）: 9 月 25 日～10 月 2 日，2 回生（2 次）: 10 月 16 日・10 月 17 日）に志望の届け出をしてもらい，11 月に決定，4 月進級時に分属します。9 月 25 日に 1 回生向け系分属・研究室ガイダンス，9 月 26 日～9 月 29 日に専修ごとに日時を定めて 2 回生向け専修分属ガイダンスを行います。1 回生も 2 回生もそれぞれの志望に応じて参加し，教員との面談を通じて系および専修の選択にあたっての疑問を解消するように努めてください。なお，系の分属志望届には希望専修を記入する欄がありますが，現時点で決まっていない場合は，「未定」を選択してかまいません。

2. 哲学基礎文化学系

哲学基礎文化学は人文学研究の基礎的領域を包括する。文化の領域について，文学研究や歴史研究とくらべると，もっとも根本的な原理を追求するという特質をもっている。たとえば歴史を記述する学問では，「実証的な真理」は自明の前提とされるだろうが，哲学基礎文化学系の学問では「実証とは何か」という問いが掲げられる。学問･文化という人間の営みを，人間のすべての営みと関連づけて考察することが，哲学基礎文化学系の学問の課題である。思想文化は断片的なものではなく，人間の生の全体に関わり，生きた統一体としてまとまりのある知の体系をなしている。その全体を真善美聖という観点から探求するのが哲学基礎文化学系の学問であるということもできよう。

哲学基礎文化学系には哲学，西洋哲学史，日本哲学史，倫理学，宗教学，キリスト教学，美学美術史学の各専修が含まれる。真なるものを真の観点から探求するのが哲学である。真理とは何かという研究領域は，従来「認識論」 と呼ばれてきたが，現代では，論理学，科学哲学が重視されている。それに対して善なるものの探求に携わるのが倫理学である。生命倫理，環境倫理など具体的な問題と「善とは何か」という原理的な問いとの接点を保ちながら，倫理学の営みが成り立っている。美学は美なるものを探求する。「美」には「真」という意味が含まれるのか，どうか。ポップアート以降の現代美術はいかなる意味において「芸術」なのか。異なる文化の間で芸術はどのような社会的機能を発揮しているか。美学･美術史学の領域では〈美学･芸術学〉，〈美術史学〉，〈比較芸術史学〉という三分野の有機的な連携で，研究活動が展開されている。聖なるものの探求に携わるのが宗教学，キリスト教学である。人間の生にとって宗教がどのような意味をもつのかを主に哲学的見地から考察するのが，宗教学であり，特定の教義や信仰をはなれて，純粋に学問的な見地から批判的共感をもってキリスト教思想を研究するのが，キリスト教学である。

他方，思想や美の理論的体系的な研究は思想史，美術史等の歴史的研究を不可欠の前提としている。西洋古代，中世，近世哲学史を含む西洋哲学史と日本哲学史の研究は体系的な思想史の確立に不可欠である。思想の真の創造は思想史への深い畏敬と洞察を前提とするものであり，同様に美や芸術の体系的な理論構築も美術史，比較芸術史の研究なくしては不可能である。人間存在が根源的に有している歴史性への深い洞察なくして思想文化の創造はあり得ない。理論研究と歴史研究からなる哲学基礎文化学系は，現代が内包する諸問題と最も根源的かつ綜合的な観点から対決する学問分野といえよう。

哲学基礎文化学系は旧「哲学科」を母胎とするが，小講座制の枠を取り払い，学際的な教育体制を確立しようとするものである。哲学基礎文化学系への分属を希望する者は，系を構成する全専修への広い関心が期待される。個々の専修への分属は，哲学基礎文化学全体への少なくとも概観的な理解を得た後になされることが望ましい。

哲学基礎文化学系に進もうとする学生諸君に期待されることは，第一に，しっかりした語学力である。どの専修でも外国語の文献を正確･綿密に読みこなす力が必要になる。外国語を学ぶことは楽しいという気持ちを最初に知ってほしい。

第二に期待されることは，資料を扱う際の厳密さである。他人の業績を利用する際には必ず出典を明記する等の，誠実でフェアな態度が，多くの情報がインターネットから得られる状況になった今日，ますます厳しく要求されている。

第三に期待されるのは，明確な表現力である。文献や作品の検討を通して自分の魂に刻み込まれたことを再表現するときに，おざなりな定型表現，借り物の美辞麗句，こけおどしの難解語を拒否して，自分に誠実な，そして他人に理解される表現を追求することが要求される。

■ 哲学専修

教　授	出　口　康　夫	近現代哲学・分析アジア哲学
准教授	大　塚　　淳	科学哲学　(生物学の哲学，　統計学の哲学)
特定准教授	大　西　琢　朗	論理学，数学・論理学の哲学
特定講師	五十嵐　涼　介	論理学史，論理学・情報の哲学

〔著書･論文〕

出口　*Nothingness in Asian Philosophy*,　Routledge, 2014.（共編著）
Moon Points Back, Oxford UP，2015.
What Can't be Said, Oxford UP, 2021.　（共編著）

大塚　Causal Foundations of Evolutionary Genetics (*British Journal for the Philosophy of Science,* 2016),
The Role of Mathematics in Evolutionary Theory, Cambridge UP, 2018.
『統計学を哲学する 』, 名古屋大学出版会, 2020.

大西　Substructural Negations (*Australasian Journal of Logic*, 2015).
Bridging the two plans in the semantics for relevant logic (New Essays on Belnap-Dunn Logic, 2020).
『3STEP シリーズ論理学』 昭和堂，2021 年.

五十嵐　情報の哲学史試論――『ポール・ロワイヤル論理学』・ライプニッツ・カント――（『哲學研究』，2023）
判断はどのようにして対象と関わるか： カントにおける単称判断とその意味論（日本カント研究，2017）
A reconstruction of ex falso quodlibet via quasi-multiple-conclusion natural deduction (Logic, Rationality, and Interaction，2017)

哲学専修は，文学部の専修の中でも，研究対象の選択の自由度が最も高い場所の一つである。専修の名前が「哲学」だけだというのは，国文学や仏文学にまじって「文学」専修があるようなものである。一段と高いはずの分類項目が，より細かい項目の間に紛れている現象。これを哲学の用語では，カテゴリー･ミステイクとも言う。しかし，これは正当な理由のあるミステイクなのである。

本専修は京大文学部創設以来の研究室であり，その後，西洋哲学史の各講座を含め哲学系の研究室が次々と設立された後でも「哲学･西洋哲学史第一講座 (哲学)」にとどまり続けた。そこには言語圏や時代や分野を限定せず，広く過去の思想伝統を吸収し，その上で独自の哲学を生み出す「場」を確保しようとする，京大哲学科の意志を感じ取ることもできる。事実，「純哲」と呼ばれた本教室は，西田幾多郎･田邊元両教授を含む歴代教官･教員の下で，「京都学派」の根拠地となったのである。

というわけで，この伝統あるカテゴリー･ミステイクの産物たる本専修では，一生に一度くらいは，物事の根本についてじっくり考え抜きたいという学生諸君に大きく門戸を開いている。社会や国家の仕組みについて，科学や宗教の本質について，人生いかに生きるべきかについて。思索が，既存の個別学問の枠をはみ出し，その学問の基 礎を問い直す射程と気概を持つとき，それは何であっても「哲学」と呼ばれ，本専修の守備範囲に入ることになるのである。

具体的にどのような研究対象が選ばれているかについては，専修のホームページに出ている各種の情報，特に「所属院生」のページを見て頂きたい。

テキストを正確かつスピーディに読みこなすための語学力，自分で議論を展開するための論理的な力。何を対象に選ぼうとも，これらは哲学の研究にとって必須の基礎体力である。したがって，本専修が提供するさまざまな講義･演習は，この基礎体力をつけるトレーニングの場という意味合いを多分に持っている。また大学院生による読書会などの自主的な研究会活動が盛んなことも本専修の特徴である。学部生も，これらに積極的に参加し，「哲学力」を身に付ける一助とされることをお勧めする。

最後に本専修の卒業生の進路について。学部卒業生の約三分の一が大学院進学，残りが就職，というのがここしばらくの状況である。就職先としては，マスコミ･出版関係，国家･地方公務員，教員，司書など，概して文学部の他専修と同様の傾向を示している。また修士課程修了者の約半数が博士後期課程に進み，残りが就職している。就職先も，マスコミ･公務員･運送業･製造業と，学部卒業生のそれと比べて広がりに遜色はない。「文系の修士課程修了者は一般就職に不利」という通念は，もはや完全に過去のものとなったのである。さらに過去 15 年ほどの博士後期課程学修者の就職傾向をならして見れば，ほぼ毎年 1 名以上がアカデミック･ポストに就職していることになる。高等教育機関における思想系教員数の減少という全国的な傾向を考えれば，ここでも本専修修了者の健闘は光っていると言える。

■ 西洋哲学史専修

（古代） 准教授　早　瀬　　篤　　プラトンとアリストテレスの哲学
（中世） 教　授　周　藤　多　紀　　十三世紀のスコラ哲学
（近世） 教　授　大河内　泰　樹　　ヘーゲルを中心とする近現代哲学

〔著書･論文〕　早瀬 'Dialectic in the *Phaedrus*' *Phronesis* 62, 2016. 「プラトン『パイドン』における形相原因説」(『哲学研究』608 号, 2022).
周藤「トマス･アクィナスの《モドゥス》研究（一）（二）」(『哲学研究』第 608-609 号，2022-23 年).
Boethius on Mind, Grammar and Logic, Brill, 2012.「中世の言語哲学」（共著）(『西洋哲学史 II』講談社，2011 年)．ジョン・マレンボン『中世哲学』岩波書店, 2023 年（訳、解説）
大河内 *Ontologie und Reflexionsbestimmungen. Zur Genealogie der Wesenslogik Hegels*, Würzburg: Königshausen & Neumann, 2008(単著)『個人的なことと政治的なこと――ジェンダーとアイデンティティの力学』彩流社，2017 年(共著) ,『はじめての政治思想』ミネルヴァ書房, 2021 年(共著), 『資本主義と危機　世界の知識人からの警告』岩波書店, 2021 年(共著).

（古代）本研究室が求めるのは，「気ままに粘土細工を拵えるより硬質の大理石を刻むように」哲学を学ぼうとする精神の持ち主である。つまり哲学をその成立の現場にまで遡って本格的に考えようとする志と古代ギリシア語の習得や文献学的訓練を厭わない忍耐心とを併せ持つ(あるいは持ちたいと思う)諸君の志望を期待する。ハードルは高いかもしれないが，学生諸氏は研究室で互いに切磋琢磨しながらこれをクリアしてきているので，心配はいらない。具体的な研究領域は初期ギリシアから後期ローマまで広範多岐にわたり，研究の対象と方法は各人の選択に委ねられるが，プラトンとアリストテレスの哲学を学ぶことは，他のテーマを主題とする研究にとっても要件となるだろう。本研究室を中心として「古代哲学会」が組織され，その機関誌『古代哲学研究(メトドス)』はすでに 55 号を数えており，最新の研究に解れる機会を提供している。
（中世）本研究室への分属を志望する者の条件は西洋中世哲学への関心と熱意である。西洋中世は時代的にも地理的にも広範囲にわたり，思想上も大きな多様性(論理学から神秘思想まで)がある。指導するスタッフの力量に限界(主にラテン語著作)があるとはいえ，何を研究の中心とするかは各人に任される。ただし，翻訳での理解には限界があり，まだ翻訳が存在しない原典も多いので，原典を読むために必要な語学(多くの場合，中世ラテン語)の修得は避けられない。また，日本で研究がすすんでいない思想家も多いので，参考文献を読むための欧米近代語の習熟も望まれる。授業のほかにも，本研究室出身者を中心とした京大中世哲学研究会(機関誌『中世哲学研究(VERITAS)』)で視野を広げる機会が得られる。
（近世）近世哲学史専修は，近世から現代にかけての西洋哲学を対象範囲とし，地理的にも言語的にも時期的にもまた哲学的傾向からいっても多様な哲学者・哲学説がそこには含まれている。志望学生に求められるのはそうした中から自分が関心を持った哲学者や哲学的問いに熱意をもって取り組むことである。どの哲学者や哲学思潮を研究対象とするとしても，事柄としての哲学と哲学的テクストとの両方に誠実に取り組むことが求められる。その際には，研究対象とするテクストが書かれたオリジナルの言語で取り組むことが原則として求められる。研究室という場は，教員から指導を受ける場であると同時に学生同士が学びあい，切磋琢磨しあい，またサポートしあう場である。自らの思考と知識を，議論を通じて深化させていくのと同時に，仲間の主張には関心を開いて耳を傾け，相互の研究に貢献し合う姿勢が求められる。

■ 日本哲学史専修

教　授　　上　原　麻有子　　西田哲学をはじめとする近代日本哲学，身体・技術・芸術論，翻訳学，女性哲学
助　教　　ウィルツ・フェルナンド　　京都学派，ドイツ観念論，神話の哲学

〔著書･論文〕上原　「日本哲学の連続性」（共著『世界哲学史8―現代グローバル時代の知』、ちくま新書、2020年）、
「高橋、西田、ボーヴォワール、レヴィナスにおける性差ある他者性を問う」（共著*Transitions-Crossing Boudaries in Japanese Philosophy*, Chisokudō Publications, 2020年
「創造する翻訳―近代日本哲学の成長をたどって」（共著『近代人文学はいかに形成されたか 学知・翻訳・蔵書』勉誠出版、2019年）
「西田哲学の再解釈―行為的直観としての顔の表情」(『思想』No.1099，2015年)
ウィルツ　Phänomenologie der Angst. Tübingen: Mohr Siebeck, 2022; ‘Miki Kiyoshi’s philosophy of history and the historical role of myth’, Asian Philosophy (2022): 1-17; ‘Myth and Ideology in Miki Kiyoshi’, European Journal of Japanese Philosophy 5(2020): 75-102; ‘Die Schichten der Zeit Schellings Periodisierung der Geschichte und seine Kritik der homogenen Zeit im Rahmen seiner Philosophie der Mythologie’, Schelling-Studien 6(2018): 43-62

日本哲学は，比較的新しい学問分野です。明治初頭から西洋哲学が本格的に受容され始め，「哲学」という語が訳出され，そして「哲学」という学問が開かれ発展してきました。日本哲学とは，その発展を通して日本独自の思考法や課題をもとに生み出された哲学だと考えられます。

明治以降，日本における日本語で書かれた哲学が，いかに形成され成熟してきたのかについて考究する。これが本専修の主な研究課題です。京都学派の知的基盤を形成した西田幾多郎，そして田辺元，三木清，西谷啓治，あるいは彼らと思想的に近い九鬼周造や和辻哲郎、鈴木大拙などに関心をもつ学生が，国内外から本専修に集まり思索を深めています。日本哲学はその由来からして，根本的に比較哲学です。テキストには，カントやヘーゲル、ハイデガー、ベルクソンなどの西洋的思想が，また一方では仏教や儒教などの東洋的宗教の概念や論理が綿密に織り込まれています。だから言葉は自然と難解を極めます。日本哲学の深遠な思想を探求するためには，東西の思想をそこから掘り起す，外国語の原文も丹念に読解し，理解する，そして比較するという一連の作業が必須です。

しかし，難解なテキストの読解にどっぷり浸かった研究をすることだけで満足するのではなく，さらにそれが，今，私たちの生活，人生に対して意義をもつにはどうしたらいいのか，このようなことを念頭におきながら，日本哲学に取り組んでください。

近年、日本哲学の分野で研究されるテーマに大きな広がりが見えてきており、戸坂潤、柳宗悦、中井正一、廣松渉、大森荘蔵、井筒俊彦など、今までにまだ研究が十分進んでいない新しいテーマを求める学生が増えています。また、環境、倫理、数学、科学などの切り口による研究も出てきており、在籍している学生たちも、様々な方面からの刺激を受けて勉強に励んでいます。

卒業論文については，十分な参考文献の収集，またその厳密な検討が大前提となります。しかし，文献の単なる検討に終わることなく，研究対象として選んだ思想そのものに自ら取り組み，それを批判的に検討する目を養う，また同時に，自己反省的にその思想の立場や方法を検討し直す態度をもつことが必要です。

近年提出された卒論のテーマ，あるいは本専修が行っている様々な活動等についての詳しい情報は，HP 上で確認してください。

http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/japanese_philosophy/jp-top_page/

■ 倫理学専修

教　授　　児　玉　　聡　　英米倫理思想史･応用倫理学

助　教　　CAMPBELL, Michael 規範倫理学・メタ倫理学

〔著書･論文〕 児玉『功利と直観』(勁草書房，2010)，Satoshi Kodama，『実践・倫理学』(勁草書房, 2020) "Bentham's Distinction between Law and Morality and Its Contemporary Significance.", *Revue d'études Benthamiennes*, (2019)，児玉聡「スペンサーの進化倫理学の検討」『哲学研究』603 号 (2018)
Campbell “Companions in Guilt and Moore's Paradox” (Symposion Vol.4 (2): 151-173 Nov 2017), “Absolute Goodness: in Defence of the Useless and Immoral” (Journal of Value Inquiry 49 (1-2): 95-112, Jan 2015), *Wittgenstein and Perception* (Campbell, M and O'Sullivan, M (Eds) Routledge Feb 2015)

本専修では，人間の行為を哲学的に考察すること，あるいは広義の「社会哲学」の研究を主たる目的とする。現代社会は，生命･環境･情報･ビジネスなどの分野で「倫理」という言葉が頻繁に使われている時代である。そうした現実的な諸問題に「対応」するのも倫理学の重要な仕事である。そうした作業は「応用倫理学」と呼ばれるが，それは既存の倫理学理論を現実問題に直接「応用」することを目指すものではない。むしろ現実の問題に正面から取り組むことを通じて，これまでの倫理学の学説や現在「倫理」として通用している様々な規範を批判的に検討することが求められている。「道徳」という現象をあたりまえのこととはせず，そこになんらかの「不可思議さ」を感じる諸君によって志望されることを望む。

本専修における最終的な卒業研究は，「応用倫理学」に属するものと「倫理学理論」に分類されるものに大別されるが，いずれを選ぶ場合でも，もう一方への目配りを欠かすことはできない。また，倫理思想史の全体を俯瞰することができるような歴史的研究も，手前勝手な思いつきや単なる意見の表明から真摯な学術研究を区別するための手段として重要な意味をもっている。

日常的な研究は，内外の文献の収集，精読が中心になる。そのため，志望者は，英･独･仏のうち少なくとも二つの外国語を習得しておくことが必須である。また，広い意味での哲学に関する他専修の講義や演習にも積極的に参加し，視野を広めることも重要である。コンピュータをはじめとする情報機器を用いた情報収集は現代の倫理学にとって必須のものとなってはいるが，たとえばインターネットにすべての情報があるといった安易な態度は厳につつしまねばならない。

研究室では，大学院生を中心にいくつかの研究会，読書会が定期的に開催されており，これに参加することは大きな刺激になるであろう。例年夏休みには，特定のテーマを集中的に勉強する合宿が開催されており，親睦を兼ねた重要な行事となっている。研究室の刊行物としては，40 年の歴史をもつ『実践哲学研究』や，いくつかのプロジェクトによって作成された資料集やサーベイ論文集があり，研究方向を定める参考になると思われる。

倫理学専修について，さらに詳細を知りたい方は，次の専修のサイトをご覧ください。

http://www.ethics.bun.kyoto-u.ac.jp/

■ 宗教学専修

教　授　　杉　村　靖　彦　　宗教哲学，現代フランス哲学，京都学派の哲学

准教授　　伊原木　大　祐　　宗教哲学，現象学，グノーシス主義の諸問題

〔著書･論文〕杉村『ポール･リクールの思想―意味の探索』(創文社, 1998), *Philosophie japonaise. Le néant, le monde et le corps.*（共編著，Vrin，2013），*Mécanique et mystique. Sur le quatrième chapitre des* Deux Sources de la morale et de la religion *de Bergson*（共編著, OLMS, 2018）,『渦動する象徴―田辺哲学のダイナミズム』（共編著、晃洋書房、2021）、『個と普遍―レヴィナス哲学の新たな広がり』（共編著、法政大学出版局、2022）, *Témoignage et éveil de soi – Pour une autre philosophie de la religion*,（Paris, PUF,　2023）.

伊原木『レヴィナス　犠牲の身体』（創文社，2010），「悪の問題を再考する――現代哲学と反神義論」（『宗教研究』第 361 号，2009），「異端表象の哲学的利用――宗教史から反歴史へ」（『宗教史学論叢 26　越境する宗教史【下巻】』，リトン, 2020）,『3STEP シリーズ宗教学』（共編著、昭和堂、2023）.

「宗教」の名の下で問題になりうる現象は実にさまざまであり，それに対する学問的なアプローチにも多種多様なものがあるが，当専修は，哲学研究を軸としてそこから宗教にまつわる諸問題へと接近していくという研究姿勢を基本としている。このような姿勢の前提にあるのは，宗教とは単に例外的な経験や特殊な信条･組織の問題ではなく，人間が人間として世界の内にあることの根源，自己の存在の根源が問われる場にほかならないという洞察である。そこでは，「宗教とは何か」という問いは，哲学の根本問題とおのずから触れ合うことになる。このように宗教と哲学とが切れ結ぶ地点に立ち，そこで求められる思索の行方を追究すること，その意味での「宗教哲学」が当専修の基本的な方向性である。この方向性は，歴史的に言えば，西田幾多郎，波多野精一，西谷啓治，武内義範，上田閑照，長谷正當，氣多雅子という当専修の歴代の担当者が，多くの場合京都学派の哲学の展開との密接な連関の下で発展させてきたものである。

したがって，宗教史学，宗教心理学，宗教社会学，宗教人類学等々，およびそれらの方法論を駆使した記述的･実証的宗教学については，当専修のカリキュラムでは主題的に取り扱っていない。しかし，もちろんそうした分野に関する知識が不要だということではないし，学生諸君のそれぞれの関心に基づいた宗教現象･宗教思想へのアプローチを排除するものではない。

宗教哲学という学問の性格上，本専修では，各人が自分の関心に基づいて比較的自由に研究を進められるように配慮している。とはいえ，自らの問題を掘り下げてより深く展開していくためには，自分の手持ちの言葉や概念だけにしがみついているのではなく，優れた先人の洞察へと分け入り，それを丹念に学ぶことによって自己の思索を鍛え抜くことが不可欠である。それゆえ，欧米や日本の優れた哲学者･思想家の中から一人を選び，集中的に研究することから出発するのが望ましい。卒業論文は，そのような勉学の一つの到達点として位置づけられている。

ちなみに，ここ数年の卒業論文でとりあげられた思想家としては，ショーペンハウアー、ニーチェ，ベルクソン，ハイデガー，ウィトゲンシュタイン、レヴィナス，メルロ=ポンティ，親鸞，九鬼、田辺、西谷らの名を挙げることができる。この一覧からも分かるように，現在の担当教員の専門領域との関係もあって，現代の仏独哲学に関心を寄せる者が多いことが近年の当専修の特色である。

当専修を志望する学生には，何よりも研究への関心と情熱をもち，研究を深めていくために必要な訓練に耐えることが求められる。この訓練においては，必要な外国語文献を読みこなす語学力を身につけることがまずは不可欠である。文献研究自体が目的ではないが，それを抜きにして，宗教哲学の諸問題を究明していくための思考力を養うことは不可能だからである。したがって，英語，ドイツ語，フランス語のうち少なくとも二ヶ国語でテクストを読み解く力を身につけることが目標とされる。とくに大学院への進学を希望する学生の場合は，このことは必須の条件となる。そうした努力を惜しまなければ，当専修は，真の意味でラディカルに思索することを学ぼうとする者にとって，刺激的な環境となるはずである。宗教思想と哲学探究との接点，現代哲学の先鋭的な問題提起，京都学派の哲学の蓄積等，さまざまなコンテクストで学生諸君の思索の糧となるものが見出されるであろう。

授業については，専任教員による特殊講義や演習に加えて，学外からの非常勤講師によって専任教員の専門外の分野を補うように配慮している。また，大学院生を中心にして数々の読書会，研究会が運営されており，学部生も関心に応じてそうした会に参加することができる。詳しくは宗教学研究室 HP を参照されたい。

■ キリスト教学専修

教授　　津　田　謙　治　　古代・中世キリスト教思想，教父学，教理史，異端研究

〔著書･論文〕津田『神と場所 ― 初期キリスト教における包括者概念』知泉書館，2021.　『マルキオン思想の多元論的構造』一麦出版社，2013.　「オリゲネスにおける神的場所概念の考察 － 『祈祷』の議論を主軸として」(『基督教学研究』38 号，2019).　「初期キリスト教教父思想におけるオイコノミア概念 － 否定神学，悪の問題を手掛かりとして」(『宗教研究』389 号，2017).「護教家教父思想における神の場所の問題」(『宗教哲学研究』31 号，2014).

キリスト教とは何か。キリスト教の歴史をどのように理解するのか。キリスト教思想はいかなる現代的意義をもっているのか。

こうした大きなテーマを念頭に，キリスト教に関連した諸問題に対して多様な方法を用いてアプローチし，根本的な分析・考察を行うために，キリスト教学専修は始まりました。その創立は，1922(大正 11)年に遡りますが，特定の信仰や教義と結びつくキリスト教神学(神学部)とは異なり，キリスト教を純粋に学問的な見地から研究することを目的とし，現在，キリスト教の歴史と思想の全般にわたる研究教育を行っています。

キリスト教が西洋ヨーロッパ世界の思想や文化の伝統的な基盤であることは言うまでもありませんが，現代のキリスト教は，アジアやアフリカを含む世界の全域に広がり，今も新しい文化世界を生み出し，また人類全体に多くの影響を及ぼしつつあります。皆さんは，このようなキリスト教の新しい動向をご存じでしょうか。

キリスト教学専修では，こうしたキリスト教という広範かつ多岐にわたる研究対象にアプローチするために，関連する諸研究分野と連携し多面的な角度から研究教育を進めています。たとえば，古代から現代までのキリスト教思想家が残した文献テキストの読解に基づく文献学的歴史学的研究はもちろん，キリスト教についてのフィールド調査やキリスト教芸術作品(建築，絵画，音楽，文学)の分析など，様々な研究方法が考えられます――実際，最近のキリスト教学専修では，日本とアジアのキリスト教(特に中国と韓国)について，フィールド調査を含めた研究を行っています――。こうした中で，特に研究教育の力点が置かれているのは，次の分野です。

1．聖書の思想研究(旧・新約聖書学)
2．キリスト教思想史研究(特に，古代教父，宗教改革，近現代キリスト教思想)
3．キリスト教思想の体系的･宗教哲学的研究

以上の研究教育のいずれにおいても，文献テキストの読解が中心であり，テキストの厳密な理解が大切になります。したがって，キリスト教専修では，文献テキストに基づく研究を行うのに必要な語学の習熟が求められます。また同時に，キリスト教の歴史と思想に関連した歴史全般(哲学史や宗教史を含めた)についての幅広く深い知識も重要です。しかし，キリスト教学を学ぼうとする者には，キリスト教という対象と正面から学問的に向き合おうとする知的好奇心と，それを実現するだけの学習意欲が望まれます。

授業は，専修スタッフによる講義，特殊講義，演習，講読のほか，学外からの非常勤講師によって，キリスト教研究の主要な分野をカバーするように行われており，さらに他専修との関連授業も含めることによって，キリスト教についての十分な学習が可能になるように配慮されています。なお，津田教授は，古代から中世にかけてのキリスト教思想(教父学・教理史)，あるいは近代ドイツのキリスト教思想(自由主義神学・宗教哲学)を中心に教育・研究活動を行っています。

キリスト教学専修について，さらに詳細を知りたい方は，次の専修のホームページをご覧ください。

http: //www. bun. kyoto-u. ac. jp/christian_studies/cs-top_page/

■ 美学美術史学専修

美学･芸術学

准教授　杉　山　卓　史　　美学・感性論

美術史学

教　授　平　川　佳　世　　西洋美術史

准教授　筒　井　忠　仁　　日本美術史（特に近世絵画史）

准教授　田　中　健　一　　日本美術史（特に仏教彫刻史）

〔著書･論文〕 杉山 「Empfindnis 概念小史」(『哲学研究』第 605 号、2020 年）. *Computational Aesthetics,* Springer, 2019（共著）. 同「「われ感ず，ゆえにわれ在り」のヘルダーにおける成立」(『美学』246，2015).

平川 *The Pictorialization of Dürer's Drawings in Northern Europe in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, Peter Lang, 2009. 同「スプランゲル作《最後の審判》―銅板油彩画の宗教的機能に関する試論」(『京都美術史学』1, 2020)

筒井「又兵衛絵巻の伝来と享受」『岩佐又兵衛展』図録(福井県立美術館，2016 年) 筒井編『仏師と絵師：日本・東洋美術の制作者たち』(思文閣出版、2023 年)

田中「法隆寺金堂木造天蓋に関する諸問題」(『京都美術史学』第 2 号、2021 年)

本専修は，〈美学･芸術学〉，〈美術史学〉，〈比較芸術史学〉の三分野からなるが，これら三分野は密接不可分の関係にあるべきという方針で運営されている。

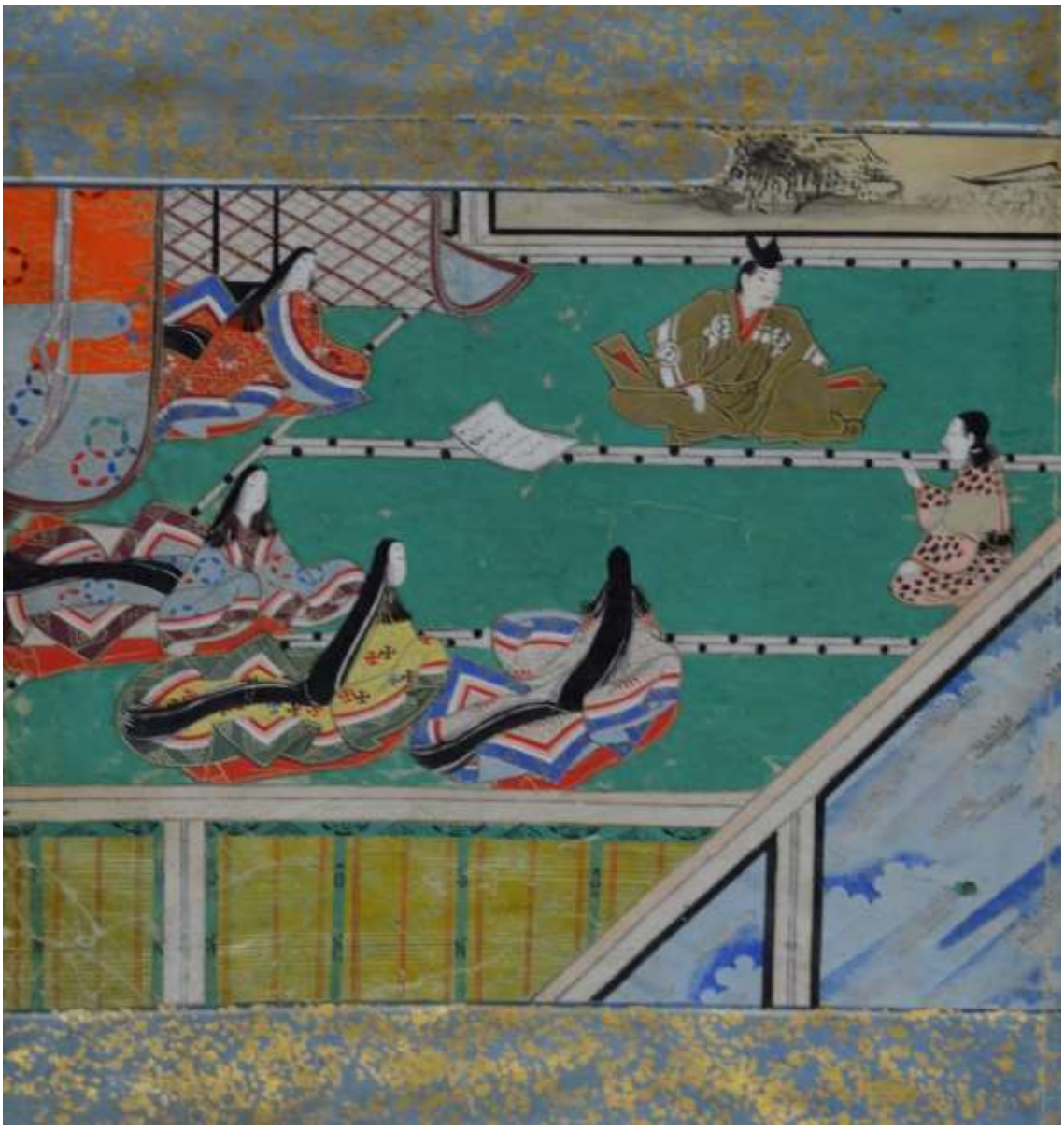
〈美学･芸術学〉は，美や崇高についての古典的議論から，芸術と社会，現代芸術，メディアアートまでを理論的に研究する。理論が現実から遊離しないように，新しい理論や思想に心を開くことは大切だが，現代芸術を考える時こそ，目先の流行にとらわれず，空間的･時間的視野を広くもって古典に立ち向かうことも重要である。美学･芸術学の文献は，英，独，仏，伊など近代語のほか，ギリシア語，ラテン語にまで及ぶが，外国語はたんに知識を得るための手段ではない。言語と思考とは不可分に結びついており，言語こそが特定の思想を可能にするのである。外国語には貪欲であってほしい。さらに今日では，科学技術がいわば共通言語のごとき力を振るっている。批判的思考を養うにはテクノロジーの問題を見据えつつ，その中で美と芸術を考えねばならない。

〈美術史学〉は，日本，東洋，そして西洋の美術史を作品に即して研究する。したがって本分野では，基本的な文献の研究とともに，実作品に即した実証的研究教育が重視される。美術史学の対象も，時代的，地域的に極めて広範囲にわたっているので早い時期に系共通科目の講義を受講するほか，日本，東洋，西洋など広い分野にわたる美術史の概説書を前もって通読しておくことが望ましい。また専攻する対象(例えば中国美術やイタリア美術)に関する文献の研究が基礎となるため，なるべく早い時期に研究対象に関わる語学を習得し，漢文，古文書等の基礎資料の読解力を養っておくことが望まれる。

〈比較芸術史学〉は，地域および時代を越えた広い視野から芸術の比較研究を行う。日本の異文化理解の仕方，逆に日本文化の異文化への影響，さらには異なる文化間の理解の可能性についての実証的研究等，今日ほど比較研究が必要とされる時代はない。従来の学問の枠組みが曖昧になり流動化している現状にあっては，比較芸術史学の果たす役割は，ますます重要になると予想される。この分野の研究者にとっても語学力が求められることはいうまでもない。以上三分野のいずれにおいても，その対象は時代的，地域的に極めて広範囲にわたっており，また，どの分野にとっても芸術作品をはじめとする芸術現象に即した研究が基礎となる。それゆえ，文献研究とともに，機会あるごとに博物館，美術館を訪ね，また演劇，文芸，音楽，映画などに接して各自の芸術経験を豊かにしてゆくことも重要である。

本専修の現在の教員及びその主たる研究領域は上記の通りであり，文芸学，演劇学，音楽学，映像学などの専任教員はいない。専門外の分野については，可能な範囲で，非常勤講師を依頼するほか，希望があれば，他学部･他大学の専門家を紹介することもある。本専修の研究が一層活発になるためには，芸術のさまざまな分野の研究が活発になる必要があることは言うまでもない。しかし，一方で，本専修の教員の専門外の分野の研究指導に関しては，高度の専門性という観点からは限界があるという点には十分に留意してもらいたい。なお，本専修の研究活動に関しては，ホームページを参照してもらいたい。

http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/aesthetics_and_art_history/aah-top_page/



当研究室保管作品「たなばた」上巻
冊子装，縦 24.0 ㎝，横 18.3 ㎝，製作時期 17 世紀。室町時代後期から江戸時代初め頃に作られた日本の短編物語の代表的なものの一つ。

3. 東洋文化学系

東洋文化学系は，「東洋」と呼ばれる地域の文化の諸相を，言語と文学と思想の面から探求し，学問の対象としようとする系である。以下の専修から構成されている。

国語学国文学　　専修
中国語学中国文学　　専修
中国哲学史　　専修
インド古典学　　専修
仏教学　　専修

ここでいう「東洋」とは，日本，中国，インドをそれぞれの中心とした三つの文化圏の総体を指すものである。それぞれの文化圏には，悠久の時の流れの中で培われてきた大きな伝統が保持されている。その流れは大河の如くであるが，しかしその流れはまた，その時々の様々な新奇なまた異質な文化的要素との接触･衝突のなかで激流となり，新たな流れを生み出し，さらにまた合流して形成されてきたものでもある。したがって，たとえ近代･現代の文化的事象を対象に学問するにしても，目の前の事実だけではなく，その背後に伏流する諸文化層，大小さまざまな伝統の流れを視野に入れなければならない。事態は，古代を扱う者にとっても同様である。たった一巻のテキストといえども，単一の文化伝統から生み出されたものと思い込んではならない。その背後にある文化の諸相に常にまなざしを向ける必要がある。

この三つの文化圏は，古くから文化的な接触を続けてきた。たとえば東アジアの芸術文化･言語文化の形成と展開を考えるとき，紀元 1 世紀頃からシルクロードを経てもたらされたインド･中央アジアの仏教の文物，とりわけ大量の翻訳仏教経典の影響を無視することはできないであろう。また，近くは 20 世紀日本を文化的中継点として，西欧文化が東アジアに与えた影響の大きさを知るならば，現代におけるこの地域の文化接触の実相について考えることになるだろう。様々の視点から，なお多くの問題を見出すことができるに違いない。

この系で学ばれる事柄の多くは，現代の世界とは時空を異にする地平で生み出されたものである。そのような事柄を理解するためには周到な準備が要求される。今日に残された文献や口頭伝承を通じて，過去の声を聞き空間を隔てた思いを読み取るためには，諸言語の確実な習得と，何よりも言葉を大切に思う繊細で厳密な読解力が不可欠である。したがって，いずれの専修を選ぶにしても，第一に必要なのは語学力である。語学力と言っても単なるスキルではない，古代語であれ現代語であれ，そこにとどめられた声と思いを大切に感じ取り読み取ろうとする愛情に支えられた力である。文献学(フィロロギー)とは「言葉を愛する学」に他ならないのだから。

■ 国語学国文学専修

教　授　　大　槻　　信　　国語学，特に中古語･古代語
教　授　　金　光　桂　子　　国文学，特に中古文学･中世文学
准教授　　河　村　瑛　子　　国文学，特に近世文学
准教授　　田　中　草　大　　国語学，特に文語の歴史

〔著書･論文〕 大槻『平安時代辞書論考　―辞書と材料―』吉川弘文館，「古代日本語のうつりかわり　―読むことと書くこと―」(『日本語の起源と古代日本語』臨川書店).
金光『中世の王朝物語　享受と創造』臨川書店，『時雨物語絵巻の研究』臨川書店(共著).
河村『古俳諧研究』和泉書院，「『笈の小文』旅中書簡小考」(『雅俗』18).
田中『平安時代における変体漢文の研究』勉誠出版，「『尾張国解文』現存テクストの成立についての試論」(『国語国文』87-12).

授業は，上記の専任教員のほかに，人間･環境学研究科の国語学国文学関係の教員と，非常勤講師とによって行われる。非常勤講師は，本学の教員の専攻しない分野を補う。国語学と国文学と，一応二つの専門に分かれているが，伝統的に，国語学研究と国文学研究を相互に密接に結びつけることによって，それぞれ豊かな実績を挙げてきた。したがって，学生も，関心の対象をあまり早くから限定せず，国語学･国文学の双方に対して幅広い関心を持つことが望ましい。

本専修では，伝統的に古典文学の研究が中心になっているが，それは京都という地理的な要因と，文学研究科図書館や附属図書館に収蔵されている，大量の貴重な古文献の存在が，古典研究に有利であるからである。図書館の原典に触れながら，研究を進めてゆけるという恵まれた環境の中で，さまざまな視点から，古典文学，古典文化の研究を進めてゆくことによって，自ずから質の高い研究が生まれてくる。もちろん，近代文学の研究も盛んであり，授業も行われているが，収蔵図書については，古典文学ほどには豊富ではない。また，現代文学については，授業は行われていないし，資料も少ないが，現代という同じ時間を生きているので，資料は各自で蒐集することもでき，創意工夫が可能である。

国語学国文学研究室では，研究活動の一環として，月刊誌『国語国文』を編集･刊行している。国語学国文学関係の専門誌として東京大学の『国語と国文学』と並んで歴史が古く，国語学国文学研究の一拠点としての役割を長く荷い続けている。また，若い研究者が中心となり，『京都大学　国文学論叢』も発行している。

『国語国文』『京都大学　国文学論叢』以外にも，研究室では貴重な資料の学界への提供を旨として編集･出版活動を行っており，最近の例では，京都大学国語国文資料叢書五十余巻の他，『改修捷解新語』『京都大学蔵大惣本稀書集成』『ヴァチカン図書館蔵　葡日辞書』を刊行し，『京都大学蔵　むろまちものがたり』全十二巻ならびに『貴重連歌資料集』全六巻，『和漢聯句作品集成』(室町前期･室町後期)，『潁原文庫選集』全十巻を刊行した。

本専修の在学生と卒業生は，京都大学国文学会という会に加入する。同窓会組織であるが，その名の通り「学会」の性格が強く，毎年 11 月～12 月頃に開かれる例会では，大学院生の研究発表や学術講演が行われる。研究とはどんなものかということに触れるためにも，聴講することが望ましい。

■ 中国語学中国文学専修

教　授　　木　津　祐　子　　中国語学史
教　授　　緑　川　英　樹　　中国古典文学
准教授　　成　田　健太郎　　中国古典学，中国書論史

〔著書･論文〕 木津『京都大学文学研究科蔵琉球写本『人中画』四巻付『白姓』』（編著，臨川書店，2013）．同「京都大学蔵王筠校祁寯藻刻『説文解字繫伝』四十巻について」（2020）(論文)，同「「官話」再読」（2022）（論文）

緑川『文選 詩篇』(共著，岩波文庫，2018～19),同『韓愈詩訳注』(共著，研文出版，2015～)．同「万里集九《帳中香》的詩学文献価値」(2021)(論文)

成田『中国中古の書学理論』(京都大学学術出版会，2016)．同「王羲之と衛夫人の師承関係について」(2020)(論文)，同「唐宋の蘭亭伝説について」(2021)(論文)

本専修が対象とするのは，文字が出現してからの3000年以上たえまなくつづき，さらにヨーロッパのロマンス諸語ほどの差異のある中国語諸方言のひろがっている時空の中で，漢字を用いて伝えられてきた言語･文学の全体である。
ただし，書きことばの上では，古くから共通の規範をもとうとする求心的傾向が強く，標準的古典語と現代共通語(普通話)との学習を出発点に，ほとんどの文献は読めるようになる。古典と近代とを乖離させずに，一つの大きな流れを見通すにも，これら2種のことばの基礎力は欠くことができない。その際，いかなる時代の作品を扱うにも，正確な語感の把握のためには，会話･作文を含めた現代語の力が前提となることは強調しておくべきであろう。また，口承系の資料を研究するには，対象地域により方言の知識が必要となることがある。

はじめにのべた対象領域の広さゆえに，専任教員のみでは充分な授業をおこなうことができない分野が数多く存在する。そうした面については，人文科学研究所，人間･環境学研究科および他大学から出講いただいている講師陣の強力な応援がある(詳細は今年度の学生便覧参照)。また院生･学生独自の読書会･研究会も，それぞれの関心に応じ開かれている。意欲的な学生には，方法論的問題を考えるためにも，中国以外の言語文化圏への関心をあわせもちつづけることをすすめる。

在学者ならびに卒業生を中心に中国文学会が組織されており，年1度の例会では同会会員の研究者による発表がおこなわれる。年2回発行される研究雑誌『中国文学報』は，学界において高い権威が認められており，現在までに95冊を数える。中国その他から来学された学者の講演会なども毎年開かれている。

木津教授は，文明の言語としての中国語という観点から，非中国語圏との接触が活溌であった周縁地域の言語に着目し，その接触によって形成された境界的中国語の実態を明らかにすることを目指している。

緑川教授は，中国古典詩と文学理論，とりわけ「唐宋変革期」と称される中唐から北宋に至る時期を中心として，「宋調」(宋詩的なるもの)の形成と受容，詩学観念の演変といった問題について考察している。

成田准教授は，前近代中国の知識人階層における「書くこと」について，特に書や散文において「作者の個性」のようなものがどのように自覚され構築されたか，作品と言説の両面から考察している。

■ 中国哲学史専修

教　授　　宇佐美　文　理　　中国近世思想史

准教授　　池　田　恭　哉　　中国中世思想史

〔著書･論文〕 宇佐美『『歴代名画記』〈気〉の芸術論』岩波書店　2010,『中国絵画入門』(岩波新書) 岩波書店　2014,『中国藝術理論史研究』創文社　2015,「杜甫詩における視覺の問題」(『日本中國學會報』第六十九集) 2017。池田『南北朝時代の士大夫と社会』研文出版　2018,『中国史書入門 現代語訳 北斉書』(共著) 勉誠出版 2021,「熊安生伝」(『京都大学文学部研究紀要』62 号)　2023。

中国哲学史は，中国人の思索の歩みを研究する学問である。よく中国哲学史と呼ぶのがよいか，それとも中国思想史と称するほうがよいかが議論されることからもわかるように，中国哲学は西洋哲学とは内容をかなり異にする。形而上学や認識論が中心課題となることはそれほど多くなく，論理学もまた発達しなかった。しかしそれは，中国人が世界や人生について充分な思索を行わなかったということではない。彼らもそれらについて，究めつくせないほどの思想的業績を遺しているのである。ただそれが，西洋とは全く思考様式や発想を異にする中国独自のものであったということである。その点をまず心に留めておいてもらいたい。

平凡ながら，中国人が何をどのように考えたかを知ること，中国哲学史研究はこの一事につきる。したがって，一切の先入観を捨て，中国人の立場に立ってその思考を跡づけることがまず何よりも必要である。西洋哲学の概念や類型にあてはめて事足れりとすることは，厳に戒めなければならない。もっともそれは，中国哲学の研究に西洋哲学の知識が必要ないことを意味するのではむろんない。中国の哲学を正確に分析するためには，西洋哲学の知識はむしろ不可欠である。ただそれを機械的にあてはめてはならないと言うのである。諸君は積極的に西洋哲学を，さらには宗教学･倫理学･美学等についても勉強してほしい。またインド哲学や仏教学の素養が必要なことは言うまでもない。

中国人の立場に立ってものを考えるためには，古典文献，すなわちいわゆる漢文が正確に読めることが何よりも必要である。学生にとって，漢文読解力修得が第一の肝要事である。したがって本専修では，演習，講読に最も力を注いでいる。その方法は，清朝考証学を踏まえた文献実証学であり，訓詁と典故とを重視する。一字一句をゆるがせにしない詳細な読みと出典調べが要求される。一見哲学とは無関係の，無味乾燥な作業と思うかもしれないが，どうか我慢してほしい。それが哲学研究の基礎となるのだから。教材の中心は経学関係の書である。経学は中国哲学の根幹であり，経学を全く抜きにした思想家は存在しない。道･仏教家の場合でも，経学がその素養にある。故に中国哲学を研究する者は，その専門分野のいかんにかかわらず，まず経学を学んでおかなくてはならない。経学演習は必修課目と思ってもらってよい。

しかし，経学が中国哲学の全てではない。仏教や道教はむろんのこと，最古の甲骨文から現代の新儒家や社会主義思想まで，中国哲学の稔りは豊かである。若いうちは自らを限定せず，できるだけ広く関心をもっていてほしい。従来の経学や儒教のみの哲学史はもはや過去の話となった。仏教をはじめとして多彩な分野に関わる講義が設けられているので、それらの積極的な聴講を期待する。

あと一つ注文を言えば，できるだけ早いうちに中国語を習得しておくこと。学術の国際交流の上からも欠かせない。

日本人にとって，中国は文化の母とも言える。色々書いたが，中国語や漢文をこれまでとくに学習していなくとも構わない。意欲ある諸君の専修を待望する。なお卒業生と院生を中心として「京都大学中国哲学史研究会」が組織され，その機関誌として「中国思想史研究」(年刊)を刊行している。

■ インド古典学専修

教　授　　横　地　優　子　　古典サンスクリット文学，ヒンドゥー教

教　授　　ソームデーヴ･ヴァースデーヴァ　　インド思想，シヴァ教，サンスクリット文学･文学理論

特定外国語担当講師　潘　涛（パン　タオ）インド・イラン文献学, トカラ仏教, 印欧語言語学

〔著書･論文〕　横地『ヒンドゥー教の聖典二篇：ギータ･ゴーヴィンダ，デーヴィー･マーハートミャ』(小倉泰と共著)，平凡社（東洋文庫)，2000 年．同 *The Skandapurāṇa Volume III, Adhyāyas* 34.1-61, 53-69.　The Vindhyavāsinī Cycle. Leiden & Groningen, 2013.

ヴァースデーヴァ　*The Recognition of Śakuntalā by Kālidāsa.*　Clay Sanskrit Library.　New York 2006.　同 *The Yoga of the Mālinīvijayottara.* Collection Indologie 97.　Pondichéry 2004.

藩　*Untersuchengen zu Lexicon and Metrik des Tocharischen*. PhD dissertation, Ludwig-Maximilians-Universität, München, 2019.

本専修では，古典サンスクリット語に代表されるインド･アーリア系諸言語と，それらの言語で編纂された古代インド文献の研究を行っている。インド･ヨーロッパ諸語の中でも古いかたちをとどめるサンスクリットの研究は，古代インド文献のみならず，インド･ヨーロッパ諸語の歴史的研究にとっても不可欠なものである。学生諸君には学部生の間に，人類の貴重な知的遺産であるサンスクリットを学習し，そこに内包される言語的叡知に触れてみることをお勧めしたい。ただし，その学習はある程度根気を要することを付け加えておかなければならない。特に本専修を志す人は，三回生までにサンスクリット文法のクラスを受講しておいてほしい。サンスクリット文献の研究に取り組むためには，これは必須である。また，サンスクリットの研究には 200 年の歴史と，その間に蓄積された膨大な研究業績がある。それらの業績の大半は，ドイツ語，フランス語，英語で書かれているので，卒業論文を仕上げるには，英語以外にドイツ語やフランス語の資料もある程度扱えることが望ましい。

本専修では，古代インドの哲学，宗教，言語，文学，文化史に関わる諸文献の研究をすることができる。専修主任の横地は，ヒンドゥー教神話伝説，プラーナ文献，古典サンスクリット文学の研究に従事するとともに，文化史的視点から女神信仰の研究も行っている。教授のヴァースデーヴァは，インド哲学全般を扱うが，特にシヴァ教文献及び古典文学とその理論(詩論・修辞学等) を専門としている。近年は新論理学を適用した文学理論の研究に力をいれている。特定外国語担当講師の潘はトカラ語文献を専門とするが，南アジアから中央アジアにおいて使われたインド・イラン語文献，中央アジア出土の写本全般にくわしい。また，毎年学内外から数名の講師を招き，ヴェーダ文献，中期インド語，近現代インド諸語，土着文法学，哲学諸派，ジャイナ教，インド科学史等の授業を開講している。

本専修は国際的にインド古典学の主要な教育・研究拠点の一つとして認められており，海外の研究者との研究交流，共同研究もさかんに行われている。そのような現状をふまえて，本専修の授業のほぼ半分は英語または日英併用で行われている。学生は日常的に英語での議論や質疑に参加することで，英語のコミュニケーション能力を高めることができる。

ジュニア・オープンキャンパスのポスターセッション用ポスター(学生製作)

■ 仏教学専修

教　授　　宮　崎　　泉　　後期インド仏教，チベット仏教

〔著書・論文〕『中観優波提舎開宝篋』テキスト・訳注『京都大学文学部研究紀要』46，2007．Atiśa (Dīpamkaraśrījñāna)—His Philosophy, Practice and its Sources, The Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, 65, 2007.『禅定灯明論』に説かれる漸門派説について，『仏教史学研究』51-1，2008．インド大乗仏教における解脱の思想と慈悲，『日本の哲学』12，2011．Atiśa の如来蔵思想—その典拠と大中—,『印度学佛教学研究』65-2，2017 他.

本専修は，伝統的に，インド及びチベットの仏教思想史の研究と教育を中心としているが，中国仏教については人文科学研究所その他学内及び学外の研究者の出講によってこれを補っている。

本専修を志望するものは，2 回生の段階において少なくとも初級サンスクリット語並びにチベット語を学習し，また学部在学中にパーリ語をも習得することが期待される。漢文仏教文献を扱い得る漢文の素養も必要であることはいうまでもない。仏教学は，国際性の高い学問であるので，大学院に進学しようとする学生は英･独･仏語のうち少なくとも一つについては作文･会話を含めて十分に習熟することが望まれる。

宮崎教授は後期インド仏教を専門とし，そのチベットへの伝播についても関心を持っている。特に，インド禅定思想のチベットへの受用の問題，並びに大乗仏教の展開について研究中である。

本専修のスタッフによる講義，特殊講義，演習のほかに，サンスクリット語，チベット語(いずれも学部共通語学)の講義が学生のために用意され，またインド古典学専修の授業のうちのいくつかは本専修と共通となっている。

令和 5 年度には学外から来講している室寺義仁講師(滋賀医科大学非常勤講師)が瑜伽行派を，佐藤直美講師(宗教情報センター研究員)が大乗経典を，志賀浄邦講師(京都産業大学教授)がインド仏教論理学を，加納和雄講師(駒澤大学准教授)がサンスクリット写本読解を，高橋慶治講師(愛知県立大学教授)がチベット語中級を担当し，船山徹講師(人文科学研究所教授)が中国仏教を，熊谷誠慈講師(人と社会の未来研究院准教授)がアビダルマを，デロシュ　マルク　ヘンリ講師（総合生存学館准教授)がチベット仏教瞑想論を，倉本尚徳講師（人文科学研究所准教授）が中国仏教を講じている。

4. 西洋文化学系

西洋文化学系は，ヨーロッパおよびアメリカの文化について，文学と言語に視点を定めて研究を行う部門であり，古典古代から中世，近･現代までの時代を広くカバーするとともに，取り扱う言語に応じて，西洋古典学，スラブ語学スラブ文学，ドイツ語学ドイツ文学，英語学英文学，アメリカ文学，フランス語学フランス文学，イタリア語学イタリア文学という 7 つの専修に分かれている。

いずれの専修においても文献資料の正確な解釈と整理が研究の基礎となるため，語学能力は極めて重要である。各専門領域の言語は言うまでもなく，ラテン語･ギリシア語の基礎知識は非常に有益であり，また近代語については作文や聞き取り，会話などの実践的運用能力も高める必要がある。従って全学共通科目の語学単位とその他の必修の語学の単位は 1･2 回生の間に取得しておくことが望ましい。

7 つの専修はいずれも論理的･実証的であると同時に自由な発想に基く研究を重んじており，それぞれの地域や文化圏の文学･言語･思想･社会に関心をもつ学生諸君を幅広く迎えることを望んでいる。文学研究科図書館には，長い歴史と伝統を誇る旧文学科から受け継いだ豊富な文献資料が所蔵されているので，これらを存分に活用してほしい。また，人間･環境学研究科や人文科学研究所など学内他部局，そして他大学からの講師も授業を担当して，充実したカリキュラムを組んでいる。専修所属の教員名，著作等については各専修の項を参照されたい。

■ 西洋古典学専修

准教授　　河　島　思　朗　　西洋古典学，神話，ローマ文化

助　教　　竹　下　哲　文　　ラテン文学，教訓叙事詩

〔著書･論文〕　河島『古代ローマ ごくふつうの５０人の歴史 ―無名の人々の暮らしの物語』（さくら舎, 2023），『基本から学ぶラテン語』（ナツメ社, 2016），『西洋古典学のアプローチ』（共編著，晃洋書房, 2021），『ホメロス『イリアス』への招待』（共著，ピナケス出版, 2019）

竹下『詩の中の宇宙　マーニーリウス『アストロノミカ』の世界』（京都大学学術出版会，2021），G. ヴァルトヘル『西洋古代の地震』（共訳，京都大学学術出版会，2021）

本専修は，古典古代にギリシア語およびラテン語で書かれたテクストについての文献学的研究に加えて，広く古典古代の文化全般を研究の視野に入れ，字義どおり西洋古典学と呼びうる総合的学問研究を目指す。

前 8 世紀のホメロスから後 2 世紀のラテン作家まで同一の文化的精神的伝統を共有する世界を古典古代と呼ぶ。そこにおいてギリシア文学は叙事詩･抒情詩･悲劇･喜劇･歴史･牧歌･小説など，さまざまな文学ジャンルを生み出し，ラテン文学はギリシア文学を継承しつつ，恋愛詩･風刺詩･弁論など独自の発展を織り込んでルネッサンス以後の再生に連なる古典の伝統を築き上げた。

これらの文学作品を主要な研究対象とし，原典批判を基本に，テクストを精細に読み，背景にある伝統を踏まえ，文脈に即した解釈を提起することが本専修の目指す一つの方向であり，そこには最近発達した記述構造分析，文体論的研究，神話構造分析などの成果も取り入れられる。

他方，西洋古典学という学問は，古典古代の当時にあっても近代の西洋古典学の出発点にあっても，文学，哲学，歴史学など人文科学分野にとどまらず，数学，物理学，天文学，医学，生物学などの自然科学分野をも含んで，人間にかかわるすべての学問分野にまたがる形で成立した。人間を分割しえない完結した個体として総体的に捉えようとする視点がその根幹にあった。近代の関連諸科学の発展は西洋古典学にもめざましい諸成果をもたらしたが，反面，専門領域の著しい細分化の結果，西洋古典学本来の学問としての全体像が見失われることにもなっている。

本専修は，こうした面への反省から，原典批判･テクスト解釈ではおおいきれない古典文化の諸相をも研究の対象に取り上げる。ギリシア文化の形成にあたっては，エジプトやメソポタミアの先進国から多大な影響が及び，他方，古典文化の伝統はビザンチン文化やカロリング朝文化，さらにはイスラム文化によって継承された。このような文化史の大きな流れをも視野に入れながら，すぐれた文学を生み出した古典古代の文化を総合的に研究する。

古典の文学あるいは語学に興味のある学生はもちろん，文化に主として関心を抱く学生も，本専修を選択しようとする学生はまず，第一次資料となるギリシア語･ラテン語の原典を読みこなす能力を養うことがもっとも重要である。できるだけ早い段階で両語学の初級文法を(少なくとも一方の 4 時間コースを 2 回生時に)習得することが必要不可欠である。語学面ではまた，辞書･研究書は外国語のものが多く，英･独･仏そのほかの近代語の学習も重要となる。そして「講読」および「演習」において読みの正確さと速さを高め，「特殊講義」において古典古代全体を視野に入れた研究の方法を学ぶ。また，古典古代の全体的理解という点では，古代哲学史，西洋古代史の研究領域とも密接な関連を有するので，これらの授業の積極的受講も望まれる。

■ スラブ語学スラブ文学専修

教　授　　中　村　唯　史　　近現代ロシア文学･思想，ソ連文化論

〔著書･論文〕『ロシア文学からの旅：交錯する人と言葉』(共編著，ミネルヴァ書房，2022)，バーベリ著『騎兵隊』(翻訳・解説，松籟社，2022)，『二十六人の男と一人の女：ゴーリキー傑作選』(翻訳・解説，光文社古典新訳文庫，2019)，『自叙の迷宮：近代ロシア文化における自伝的言説』(共編著，水声社，2018)，トルストイ著「ハジ・ムラート」『ポケットマスターピース４・トルストイ』(翻訳，集英社文庫，2016 所収)，『再考ロシア･フォルマリズム：言語･メディア･知覚』(共編著，せりか書房，2012)

また，上記に加えて，下記の先生が，協力教員として教育および研究指導に参加している。

准教授　　堀　口　大　樹　(人間･環境学研究科)　　スラブ語学，バルト語学

〔著書･論文〕Имперфективация заимствованных глаголов в русском языке. Russian Linguistics. 42, 345-356, 2018,『ニューエクスプレスプラス・ラトヴィア語』(白水社, 2018), Восприятие обозначения "русскоязычных" в балтийских странах: социолингвистический опрос. W poszukiwaniu tożsamości językowej. 6. 39-48, 2021.

本専修は，ロシアから東欧にかけての広大な地域に居住しているスラブ諸民族の文学，文化，言語を，広い視野から研究･教育することをめざしている。スラブ民族は，ロシア，ウクライナ，ポーランド，チェコ，ブルガリアほか，多様な民族に分かれ，その文化･言語は全体として一定の均質性を持つと同時に，それぞれに個別の特徴を表してもいる。ロシア政府・軍によるウクライナ侵攻という事態は，日本ではなお多分に未知の領域であるスラブ諸民族の文学・文化・思想を研究することの重要性を示している。

専修担当教員の中村はロシア文学･ソ連文化論を専門とし，主に 19 世紀初頭から現代に至るロシア文学･思想・文化を対象とした研究を行っているが，多言語･多文化国家を標榜したソ連時代の状況にも強い関心を持っている。協力教員の堀口は，ロシア語とラトビア語を主な対象としたスラブ語学とバルト語学を専門とし，テクストの特徴やコミュニケーションの場面，さらには社会や文化，歴史などの多角的な視点から言語事象を研究している。

その他にも，文学研究科，人文科学研究所，および他大学の先生方の助力を得て，近現代ロシア文学･文化･思想･言語，ポーランド、バルト、日露比較など多様な授業を専修科目として指定している。また授業の他にも，公開講演会や上映会の開催等，学生諸君の多様な関心にできるだけ応えられるように努めている。

とは言え，現時点において学生諸君が習得するために最も条件が整っており，1 回生から学習することができるのはロシア語である。ロシア語がスラブ研究の基盤となってきた歴史的な経緯，またトルストイ，ドストエフスキー，チェーホフ他のロシア文学が近代以降の日本の文学･思想に深甚な影響を及ぼしてきたことなどもあって，本専修ではロシア･ソ連に関する授業が多い。卒論のテーマは，ロシア文学・思想・絵画・音楽，ポーランド文学，チェコ文学，ユーラシア民族論，日露比較文学など、多様である。

本専修の授業は，さまざまな可能性も含めて文献を緻密に読み解き，解釈する作業と，ゼミでの報告とディスカッションが中心だが，そのためには言語に関する広い知識と感性とともに，背後にある時代や伝統に関する理解も必要なので，講義や特講の授業では，文学史や文化史，また文学作品や文化現象を考察するための枠組や方法についても講じている。専修の授業でスラブ世界の文学･文化･言語を考えるための視座を確立してもらいたい。

写真：専修主催公開講演会　チンチ・クラプリ氏(ヘルシンキ大学)
「ソ連とロシアにおけるサーミ文学」(2022 年 11 月)

そのうえで，学生諸君がどのような領域，分野に関心を持ち，理解と考察を深めていくかは，個々人の選択に委ねられている。教員がすべての学生の関心に十分に応えられないこともあるだろうが，その場合でも諸君と意見や見解を交わすことはできる。人文学の基本が「対話」であると喝破した文芸学者ミハイル･バフチンを生んだロシアを初めとするスラブ言語文化の研究を志す諸君に期待したいのは，言語に対する感性と，文化や歴史に関する知識，自分の関心をどんどん拡げていこうとする知的意欲，そして教員や先輩との議論も辞さない自主的な姿勢である。

■ ドイツ語学ドイツ文学専修

教　授　　松　村　朋　彦　　近代ドイツ文学･文化史（令和６年３月退職予定）

准教授　　川　島　　隆　　近現代ドイツ文学･メディア論

〔著書･論文〕 松村『越境と内省――近代ドイツ文学の異文化像』(鳥影社，2009)，『五感で読むドイツ文学』(鳥影社，2017)，『文学と政治　近現代ドイツの想像力』(共著，松籟社，2017)。
川島『カフカの〈中国〉と同時代言説』(彩流社，2010)，『ハイジ神話　世界を征服した「アルプスの少女」』(訳書，晃洋書房，2015)，カフカ『変身』(訳書，角川文庫，2022)。

本専修の研究教育の対象領域は，中世から現代へといたるドイツ語圏(オーストリア，スイスを含む) の言語文化全般にわたっている。松村教授は，18 世紀後半から 19 世紀前半にかけてのドイツ文学を文化史的な観点から考察しようと試みている。川島准教授は，19 世紀から現代に至るまでのドイツ文学をジェンダー論的に読むかたわら，メディア論にも関心を寄せている。専任教員の専門分野からもわかるように，研究教育の中心をなしているのは 18 世紀以降のドイツ文学であるが，それ以外の研究領域についても，人間･環境学研究科や人文科学研究所の教員ならびに他大学からの非常勤講師，さらには外国人教師の協力を得て，多種多様な授業が開講されている。ドイツ語学に関する授業も毎年おこなわれている。授業の他に，学生による読書会も盛んである。学生の卒業論文の対象は，近代･現代の作家や作品をはじめ，ドイツ語学ドイツ文学のさまざまな領域におよんでいる。

本分野の研究教育の特色は，講座開設当初から一貫して，原典の綿密な読解を重視する点にあり，この伝統は今日もなお生きつづけている。とりわけドイツ語を学びはじめてまだ日の浅い学部学生のための講読や演習の授業では，ドイツ語のテクストを正確に読むための訓練に最大の力点がおかれている。だが他方では，新しい方法論の出現と対象領域の拡大によってますます多様化しつつある現在の研究状況をふまえて，せまい意味での語学･文学研究の枠組にとらわれることなく，広くドイツ語圏の諸芸術や文化と社会のさまざまな問題に目を向けることもまた必要であろう。

さらに，ドイツ語圏の言語文化が他の欧米諸国との密接な影響関係のもとに成立，発展してきたことを考えるなら，ドイツ語学ドイツ文学を西洋文化全体とのかかわりのなかでとらえようとする視点もまた，今後ますます重要になってくるだろう。

このような意味で，ドイツ語学ドイツ文学を学ぼうとする学生諸君には，言葉に対する鋭敏な感覚と西洋文化全般に対する広範な関心をもつことを期待したい。

■ 英語学英文学専修

教　授　　家　入　葉　子　　英語学
教　授　　廣　田　篤　彦　　イギリス演劇
准教授　　南　谷　奉　良　　イギリス・アイルランド小説

〔著書･論文〕

家 入　*Negative Constructions in Middle English* (Kyushu University Press, 2001). *Verbs of Implicit Negation and their Complements in the History of English* (John Benjamins, 2010).

廣田 "The Tardy-Apish Nation in a Homespun Kingdom：Sartorial Representations of Unstable English Identity", *Cahiers Elisabethains* 78 (Universite Paul-Valery Montpellier III 2010).

"Circes in Ephesus：Civic Affiliations in *The Comedy of Errors* and Early Modern English *Identity", The Shakespearean International Yearbook* 10 (Ashgate 2010).

南谷　"The Metamorphosis of Stephen Da(e)dalus: The Plesiosaurus and the Slimy Sea," *James Joyce Quarterly,* vol. 58 (Fall 2020-Winter 2021). 「『ユリシーズ』と動物の痛み―レオポルド・ブルームの優しさについて」『ジョイスの挑戦―『ユリシーズ』に嵌る方法 (JJJS(Japanese James Joyce Studies)), 金井嘉彦, 吉川信, 横内一雄編著, 言叢社, 2022 年

本専修の講義は，3 名の専任教員のほか，人間･環境学研究科および学外の教員によって行われ，英語学と英文学のほぼすべての分野を網羅するようになっている。(大多数の講義はアメリカ文学専修の講義としても認定され，また，アメリカ文学専修の講義の大多数は本専修の講義としても認定される。）　英米人教員によるものを除いて，講義は日本語で行われるが，その場合にも教材は英語の原典を用い，作品の正確で厳密な読解を特に重視する。

本専修では英語学と英文学に関する多くの科目を提供しており，特定の狭い分野のみに限定することなく，幅広い関心を養うのが好ましい。卒業論文は英語で書くことになっているので，英語の運用能力を高める努力が必要とされ，英米文専修学生を対象に提供する 'Academic Writing'の科目を履修することが望まれる。

■ アメリカ文学専修

教　授　　森　　慎一郎　　アメリカ小説

准教授　　小林　久美子　　アメリカ小説

〔著書･論文〕 森「机の上の原稿―『夜はやさし』における精神科医の破滅について」(『英語青年』第 147 巻第 7 号).「ギャツビー･ゴネグション―フィッツジェラルド『偉大なギャツビー』をめぐって」(『みすず』 第 46 巻第 3 号). 同アラスター･グレイ『ラナーク―四巻からなる伝記』(訳) 国書刊行会. 同 F･スコット･フィッツジェラルド『夜はやさし』(訳) ホーム社.
小林「『人間の根源的な状況』について」(『フォークナー』18 号, 2016 年). "'Only the Flat Irons': Counter-monuments in *The Sound and the Fury*"(*The Journal of the American Literature Society of Japan* Vol. 12, 2014 年). 同ラモーナ・オースベル『生まれるためのガイドブック』(訳)白水社.

本専修の授業は，2 名の専任教員のほか，人間･環境学研究科および学外の教員によって行われ，主として 19 世紀以降のアメリカ文学について，できるかぎり多様な領域を網羅するようになっている。また，本専修の授業の大部分が英語学英文学専修の単位として認定されるのと同じように，英語学英文学専修の授業も大部分，本専修の単位として認定される。学生は特定の狭い分野のみに限定することなく英語学英文学の分野や他の外国文学についても，できるだけ広く理解を深めることが望ましい。

英米人教員によるものを除き，授業は日本語で，英語の原典を用いて行われる。特に重視されるのは作品の精密な読解であるが，卒業論文は英語で書くことになっているので，'AcademicWriting' 等の科目を履修して，英語の運用能力を高める努力が必要とされる。また，日本文学にも関心を抱き，日本語の理解，日本語による表現能力を深めるために常日頃努力することも大切である。

■ フランス語学フランス文学専修

教　授　　永　盛　克　也　　17 世紀フランス文学、ラシーヌ
教　授　　村　上　祐　二　　フランス近現代文学、プルースト
准教授　　鳥　山　定　嗣　　フランス近代詩、ヴァレリー
特定准教授　ジュスティーヌ・ル・フロック　　17 世紀フランスの思想と文学

上記に加えて，学内の下記の教員が，講師として教育ならびに研究指導に参加している。
教　授　　森　本　淳　生　（人文科学研究所）　19-20 世紀の文学と思想　マラルメ，ヴァレリー
准教授　　守　田　貴　弘　（人間・環境学研究科）　言語学，フランス語学
准教授　　中　筋　　朋　（人間・環境学研究科）　演劇学，フランス近代文学
助　教　　藤　野　志　織　（人文科学研究所）　フランス近現代文学、ブルトン

〔著書･論文〕 永盛『文学作品が生まれるとき―生成のフランス文学』（京都大学学術出版会，2010）（共著）；*Comment la fiction fait histoire,* Champion, 2015（共著）；*Scandales de théâtre en Orient et en Occident,* Sophia UP, 2021（共著）
村上 *La Grande Guerre des écrivains*, *d'Apollinaire à Zweig*（共編著）, Gallimard, 2014；Marcel Proust, *Cahier 44*(批評校訂版), Brepols Publishers/BnF, 2015, 2 vol.
鳥山『ヴァレリーの『旧詩帖』―初期詩篇の改変から詩的自伝へ』（水声社，2018）；*Paul Valéry et les écrivains*, Fata Morgana, 2018（共著）
ル・フロック *Ardeur et vengeance：anthropologie de la colère au XVIIe siècle*, Champion, 2023（à paraître）
森本『〈生表象〉の近代―自伝，フィクション，学知』(編著)，水声社，2015；*Paul Valéry. L'Imaginaire et la genèse du sujet. De la psychologie à la poiétique*, Minard Lettres Modernes, 2009
守田『フランス語学の最前線第 5 巻』（共著，ひつじ書房, 2017）
中筋『フランス演劇にみるボディワークの萌芽―「演技」から「表現」へ』（世界思想社, 2015）
藤野「アンドレ・ブルトンにおけるドキュメントの問い―ありのままの記述についての一考察」（2021）

なお，2023 年度は学外非常勤講師として，伊藤玄吾同志社大学准教授が 16 世紀の文学を，小田涼関西学院大学教授がフランス語学を，横田悠矢三重大学特任准教授が自伝的作品を講じている。

フランス語学フランス文学専修では，フランス語読解力の養成を主眼としつつ，テクストの解釈法，文学批評の方法論，文献資料の調査法などを学ぶことでフランス文学研究の基礎的能力を身につけることを目指すとともに，作品の背景にある思想史的，歴史的，社会的文脈を含めたフランスとフランス語圏の文化についての広い知識を身につけることを目的にしている。フランス人教師の授業においては，上記の方針をふまえたうえで，フランス語を正確に読むこと，書くこと，話すことがバランスよく修得されるよう配慮されている。

本専修における研究の対象となるのは狭義の「文学」に限らない。美術，音楽，映画などの芸術作品や芸術批評，思想，哲学，歴史に関わる著作など，フランス語で書かれた文献であれば研究の対象となりうる。また，中世から現代に至るまで，フランス語で書かれた文献であればいかなる時代のものでも研究の対象として選んでよい。当然のことながら，卒業論文のテーマは学生が主体的に選ぶことが期待される。

このようにジャンルや時代を問わず，フランスあるいはフランス語圏の文学･芸術･思想に関心のある人は，ぜひフランス語で書かれたテクストを入り口にして，奥深いフランス文化の探求の道に分け入ってみてほしい。

■ イタリア語学イタリア文学専修

准教授	村　瀬　有　司	イタリア・ルネサンス文学
特定准教授	イダ・ドゥレット	イタリア近現代文学

〔著書･論文〕 村瀬：トルクァート・タッソ『詩作論』(訳書、水声社、2019 年)、パオロ・ジョーヴィオ『戦いと愛のインプレーザについての対話』(抄訳、『原典イタリア・ルネサンス芸術論』下巻、名古屋大学出版会、2021 年、所収)、; *Some effects of separated direct speech in Tasso's «Gerusalemme liberata»* in «Studi Tassiani» 69, 2021.

ドゥレット：E. Montale, *Antologia da "Altri versi"*, prefazione di Alberto Casadei, introduzione, selezione e commento a cura di Ida Duretto, Pisa, ETS, 2017. *«Il mondo può / fare a meno di tutto, anche di sé». Montale, Sartre e il tema della fama in "All'alba"*, in «REM, Rivista Internazionale di Studi su Eugenio Montale», 1, 2020. *«Que' due lettori (forse voleva dire attori)»: Madame de Staël, Leopardi e la traduzione 'perfetta'*, in «Studium Ricerca», 5, 2020.

イタリア文学は，ダンテ，ペトラルカ，ボッカッチョの三大詩人を筆頭に，アリオストやタッソらルネサンスの詩人から，マキァヴェッリやブルーノをはじめとする個性的な思想家，ガリレオに代表される科学者，さらにはゴルドーニやレオパルディやマンゾーニ，あるいはピランデッロやカルヴィーノやウンベルト・エーコといった近現代の作家・詩人・劇作家にいたるまで，多彩な逸材を擁している。中世から現代に至るまで、ヨーロッパの文芸・芸術・思想に大きな影響を及ぼした文人・詩人が多数みいだされる。

一方で，イタリア語学イタリア文学を専門に学ぶことができる国内の教育機関は少ない。研究の裾野が狭いために，重要でありながらいまだ日本に紹介されていない詩人・作家も数多い。このような現状のなか，当専修は，国内の数少ない専門教育機関としてイタリア語とイタリア文学を学ぶ貴重な機会を提供している。

専修担当教員の村瀬は，ルネサンス期の詩と詩論を研究している。特定准教授のイダ・ドゥレットは近現代のイタリア文学の研究を行っている。専修の授業では、ダンテ、ペトラルカからレオパルディ、モンターレ、カルヴィーノまで、多様な詩人・作家を取り上げている。また他大学の先生方の協力をえて幅広い分野からトピックを提供することに努めている。若手研究者主催の読書会も盛んに行われている。

専修の授業で何より重要となるのは，原典の正確な読解である。学部生は日々の授業でイタリア語の読解力を培ったうえで，それぞれが興味を抱く分野にアプローチしている。近年の卒業論文では，ジャンバティスタ・バジーレ，マンゾーニ，ピランデッロ，プリーモ・レーヴィ、ブッツァーティ、ジャンニ・ロダーリといった作家が取り上げられている。またマスカーニのオペラの台本や、イタリアのポップグループの歌詞を論じた卒業論文もある。

イタリア語の授業（共通教育）は、1 回生から受講できる。文学部でも、文法を集中的に学ぶ『イタリア語 4 時間コース』が開設されている。2 回生以上を対象にイタリア語講読の授業も開かれている。また 1 回生から履修できる「イタリア文学史」の講義では，イタリア文学にアクセスするための手ほどきが行われている。興味のある方はぜひどうぞ。

専修の情報はこちらから：HP | 京都大学イタリア語学イタリア文学専修 (italomaniakyoto.wixsite.com)

（Twitter）https://twitter.com/italkyoto

（授業の様子）

5. 歴史基礎文化学系

歴史基礎文化学系は，日本史学･東洋史学･西南アジア史学･西洋史学･考古学の 5 つの専修によって構成されている。各専修は，いずれも固有の研究分野と研究方法をもち，それぞれが確固とした学問的伝統を有しているが，他の 4 専修とは研究方法を大きく異にする考古学も含めて，全体を歴史学として一括することができる。歴史学は，人類社会の発展の諸相を時間軸によって跡づけ，考察する学問である。歴史基礎文化学系は，5 つの個別分野の特性や固有の課題を尊重しながら，歴史学としての共通の課題に立脚して構成された系である。

本系においては，上に述べたような系の共通性を土台としてふまえつつ，各専修の独自の要請を加味して，カリキュラムを編成している。各専修ではそれぞれ，入門的な性格をもつ講義，より専門的な内容にふみこんだ特殊講義，演習，実習，講読などの必修科目を設定しているが，これらの科目の配当年次は専修によって異なっている。日本史学は講義･講読･基礎演習を，東洋史学と西洋史学は講義･講読を，西南アジア史学は講義･語学をそれぞれ 2 回生に配当しているが，考古学は講義を 1 回生に，講読･実習を 2 回生に配当している。本系への分属を希望する学生諸君は，これらの点をふまえて，3 年次にいずれの専修に進むのかを十分に考えておくことが望ましい。

各専修とも，それぞれの必修科目以外に，広く歴史基礎文化学系内からの講義･特殊講義などの授業の履修を求めている。これは，上に述べたような歴史学としての共通性を考慮して，専修の枠にとらわれずに，関係する諸学問分野の知識を学び，学問の視野を広げることができるように配慮したものである。とくに 2 回生の諸君は，この点をよく考えて，各専修の講義を共通して履修することが望ましい。

また，いずれの専修を選ぶにしても，まず必要なのは語学などの基礎的な学力である。1･2 回生のあいだに，語学をはじめとする基礎的な科目の勉強を進めて，単位を修得しておくことが必要である。各専修の専門的な教育は，こうした基礎があることを前提として行われる。

各専修は，それぞれが 1 つの研究室を構成している。3 回生以降は，この研究室が，専門的な知識を学び，卒業論文の作成に向けて勉強する場となる。各研究室には，担当の教員のほかに，多くの大学院生が所属して研究を進めている。志望を決めるさいには，上級生や大学院生の助言を求めるのも 1 つの方法であろう。

■ 日本史学専修

教　授　　吉　川　真　司　　日本古代史
教　授　　上　島　　享　　日本中世史
教　授　　谷　川　　穣　　日本近代史
准教授　　三　宅　正　浩　　日本近世史
助　教　　松　井　直　人　　古文書室　(日本中世史)

〔著書･論文〕　吉川『律令官僚制の研究』塙書房，1998．同『律令体制史研究』岩波書店，2021．同『飛鳥の都』岩波新書，2011．同『聖武天皇と仏都平城京』講談社学術文庫，2018.

上島『日本中世社会の形成と王権』名古屋大学出版会，2010．同『日本の歴史 08　古代天皇制を考える』(共著)　講談社学術文庫，2009．同『日本宗教史』Ⅰ・Ⅱ(共編)吉川弘文館，2020～21。

谷川『明治前期の教育･教化･仏教』思文閣出版，2008．同『岩倉具視関係史料 上・下巻』(共編)思文閣出版，2013．同『講座明治維新 11　明治維新と宗教・文化』(共編)有志舎，2016，同『「甲子園」の眺め方―歴史としての高校野球』(共編)小さ子社，2018.

三宅『近世大名家の政治秩序』校倉書房，2014．同「江戸幕府の政治構造」『岩波講座日本歴史』第11巻・近世2，岩波書店，2014.

松井「南北朝・室町期京都における武士の居住形態」『史林』98-4，2015．同「室町幕府山城国支配の展開と山城守護―南北朝・室町期を中心に―」『史学雑誌』131-4，2022.

吉川教授は，日本古代の政治・社会・文化に関する研究を行なっており，近年は寺院史・地域史・文化交流史を中心に検討を続けている。上島教授は，政治･社会経済･宗教文化の側面より，日本中世社会の形成を考察しており，近年は鎌倉･南北朝期へと研究対象を広げている。谷川教授は，近代日本における教育と宗教の関係史を起点として，文化・政治・思想など，明治期を中心に近代社会の形成・展開過程を多角的に検討している。三宅准教授は，日本近世の政治史について研究しており，近世大名家の政治構造や幕藩関係を軸に考察を進め，近世国家の成立過程とその特質を研究している。松井助教は，都市京都と室町幕府との関係史的考察を基礎に、中世後期の政治・社会体制の展開を見通そうとしている。

〔研究･教育の内容〕

専門分野についての特殊研究が講義されるほか，スタッフのカバーできない分野については人間･環境学研究科，人文科学研究所，総合博物館など学内各部局，あるいは学外からの講師による講義が行われる。学部学生には，歴史学の基礎になる文字史料の正確な読解力を身につけることが要請されるので，演習のかなりの部分はそれにあてられる。古文書は，古代･中世･近世･近代それぞれに固有の性格と研究上の問題点をもっているので，演習以外にも実地調査や特別研修などに自発的に参加し，体得することが望ましい。とくに，京大日本史の特色は実物史料による教育にあり，総合博物館･古文書室に蒐集された古文書･古記録や影写本と早くから日常的に親しむのがよい。4 回生になると，卒業論文のための演習が必修で，自分でテーマをえらび，発表しながら，論文をまとめていく。みずから問題を発見する力を養うことが肝要である。

〔どんな人を望んでいるか〕

歴史学は地球上に継起した人類社会の展開の諸相を時間軸にそって位置づけ，そこに示された事実が現在のわれわれにとってもつ意味を認識しようとする学問である。日本史学は歴史学の一分野として，日本列島における住民の歴史を研究し，その固有の特質を人類史の普遍的性質とともに把握しようとする。したがって，広く国際的な視野から日本史をとらえる姿勢が必要で，歴史学はもとより，国文学･考古学･地理学･人類学･社会諸科学など，隣接科学とその成果に関心の深いことが望ましい。歴史に対する問いは現代の生活の中から発せられるのであるから，現実の人間生活のあらゆる側面に興味をもち，それをとりまく社会や政治･文化の動向にもたしかな眼をもちたい。世に「歴史好き」は多いが，その多くは研究成果の消費者にとどまっている。研究を進め，創造する苦しみをいとわない人をもとめている。歴史の史料は多様であるが，中心は文字史料である。木簡から文書･記録･編纂物まで，質を異にする諸種の史料を読みこなす力が最低限要請される。

■ 東洋史学専修

教　授　　吉　本　道　雅　　中国古代史

教　授　　中　砂　明　徳　　中国中世･近世史

〔著書･論文〕　吉本『中国先秦史の研究』(京都大学学術出版会，2005)

中砂『中国近世の福建人　士大夫と出版人』(名古屋大学出版会，2012)

東洋史学大講座は東洋史学専修と西南アジア史学専修の二専修から構成される。そのうち東洋史学専修の対象とする分野は，中国史および東アジア諸民族史(モンゴル，マンチュリア，朝鮮，東トルキスタン，チベット，東南アジアなどの諸民族･諸国家)である。現在の教員は上記の 3 人であるが，ほかに人間･環境学研究科，人文科学研究所などの教員の協力を得，豊富多彩な授業が行なわれている。

歴史学は史料にもとづく学問であるから，正確な史料読解力が先ず要求される。中国史を中心とする東洋史では，とくに漢文史籍の演習，講読に力を入れており，3 回生になるとその予習に追われることになる。朝鮮史や内陸アジア史さらには東南アジア史を志望する者も，漢文の修得は必須であり，また現代中国語は中国の論文を読むためだけでなく，古典文を理解するためにも，東洋史の学生にとっては必須の語学であるから，機会を見つけて学習しておくのが望ましい。もちろん中国史以外の研究を専門にしようと志す者は，それぞれの諸言語(朝鮮語，モンゴル語，満洲語，チベット語，ベトナム語など)を学ばねばならない。それらの言語の一部は学部で開講されており，また開講されていない言語についても，学習の機会を得ることはできる。要は各人の学習への意欲にかかっているのである。

歴史学は現在人がどのように生き，かつてどのように生きてきたか，を問うことから始まること，東洋史もその一環であることは言うまでもない。修学上強く希望することは，はじめから研究対象をせまく限定せず，いろいろな分野に関心をもち，幅ひろい知識を身につけることである。それによって豊かな人間性を養い，歴史に対する“眼”をそなえることになろう。

京都大学は，東洋史を学ぶのに最も恵まれた環境にある。文学研究科図書館を始め，文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター(羽田記念館)や人文科学研究所内に設置された東アジア人文情報学研究センターなどが，全国にもまれな東洋史関係文献の一大宝庫を形作っている。また，専門研究者があらゆる方面にわたって，厚い層を形成している。研究室内でも，研究生･研修員･大学院生の研究テーマは，東洋史学のほとんど全領域をおおい，テーマごとの自主的な研究会が学部生を交えて行われている。研究生･研修員･大学院生は学部生の日常の勉学におけるよき指導者でもある。

東洋史学研究室には，全国学会である東洋史研究会の事務局が置かれている。東洋史研究会は 1933 年に創設され，毎年 1 回大会を催し，学術誌『東洋史研究』(季刊)を発行している。同誌は国際的にも声価の高い専門雑誌で，若い研究者の登竜門でもある。

■ 西南アジア史学専修

教　授　　磯　貝　健　一　　イスラーム期中央アジア史，イスラーム法廷文書研究

准教授　　岩　本　佳　子　　イスラーム期中東史、オスマン朝史、遊牧民研究

〔著書･論文〕磯貝真澄・磯貝健一編『帝国ロシアとムスリムの法』昭和堂，2022 年ほか

岩本佳子『帝国と遊牧民：近世オスマン朝の視座より』京都大学学術出版会, 2019 年

岩本佳子「「ワクフのレアーヤー」たる遊牧民：オスマン朝における徴税権の複層化とその影響」『東洋史研究』第 80 巻第 3 号, 2021 年ほか

西南アジア史学研究室は，広く西アジアの歴史にも関心を寄せた著名な東洋史学者宮崎市定，わが国の古代イラン学研究の先駆者足利惇氏両教授らの尽力により，西アジア･中央アジアの歴史と文化に関する研究･教育を推進するため 1969 年に開設され，初代の教授にはわが国で最初にイスラーム時代中央アジア史の研究分野を開拓した羽田明が就任した。以降本専修では，イスラーム世界の歴史を軸に，古代オリエント史を含む領域に関する研究･教育を展開してきたが，現時点では主としてイスラーム時代の西アジアと中央アジアに関する授業が開設されている。

本格的な歴史研究が，研究書や翻訳などの二次的文献ではなく，あくまで原典史料に基づかねばならぬことは改めて言うまでもなく，本専修へ進む者には，まず原典史料を取り扱うための言語を習得することが不可欠である。現時点では，アラビア語，ペルシア語，トルコ語(オスマン語を含む)などの文献を用いた入門，初級の講義をはじめ，原典テキストを講読･研究する演習に至るまで様々な授業が開設されているので，専修生は自らの関心･興味に従って学習する言語を選択することが出来る。ただし，アラビア語はイスラーム世界のいわば核となる言語であるから，イラン史やトルコ史，中央アジア史，南アジア史の研究を志す者も，基礎的な知識を持つことが望ましい。

本専修では，個々の学生の知的関心は最大限尊重され，学生は自由に研究のテーマ(具体的には卒業論文の主題)を古代オリエント史やインド亜大陸の歴史をも含む広範な分野のうちから選ぶことができ，また専任の教員は学生が研究を進める上での可能な限りの助力を惜しまない。しかしながら，限られたスタッフと授業数の枠内では，例えばイベリア半島からインドネシア島嶼部におよぶイスラーム世界の全域をカヴァーすることはすでに不可能であるから，専修生には，授業で習得した原典史料の読解能力と歴史を構築するための論理的方法を自らが選択した対象に対して創造的に応用することが期待される。

そのように，主体的に研究を推進するためには，その分野の研究が過去においてどのように進展してきたかということ，すなわち研究史を把握することが出発点とならねばならない。それ自体現在では問題視される現象ではあるが，西アジア･中央アジアの歴史研究は，近年に至るまで現地の学者よりむしろ西欧諸国の専門家によって推進されてきたという事情が存在するため，あるひとつの問題の研究史を辿るに際しても，複数のヨーロッパ語(フランス語，ドイツ語，ロシア語など)の文献を読むことが要求されることになる。こうした諸言語は，専修に進んだ後必要に応じて学習することも出来るが，それ以前にも少なくとも第一・第二外国語は十分に習得しておく必要がある。

本専修に関連の深い施設として，北区大宮南田尻町に羽田記念館がある。この施設は，国際的にも著名な北アジア，中央アジア文化史の専門家であり，本学の総長を務めた羽田亨博士(1882-1955)を記念して建設されたものである。中央アジア･西アジアに関する文献が備えられ，定期･不定期の研究会や講演会がここで開催されている。

また本研究室には，関連学会である「西南アジア研究会」の事務局がおかれ，雑誌『西南アジア研究』を年 2 回刊行している。

本専修に関する更に詳しい情報については，磯貝(753-2741)に直接照会されたい。

■ 西洋史学専修

教　授　　小　山　　哲　　西洋近世史
教　授　　金　澤　周　作　　西洋近代史
准教授　　藤　井　　崇　　西洋古代史
講　師　　安　平　弦　司　　西洋近世史

〔著書･論文〕 小山　哲『ワルシャワ連盟協約　(一五七三年)』東洋書店，2013 ほか.
金澤周作『チャリティとイギリス近代』京都大学学術出版会，2008 ほか.
藤井　崇 *Imperial Cult and Imperial Representation in Roman Cyprus* , Franz Steiner, 2013 ほか
安平弦司 'Transforming the Urban Space: Catholic Survival Through Spatial Practices in Post-Reformation Utrecht', *Past & Present* 255 (2022) ほか.
服部良久･南川高志･小山･金澤(編著)『人文学への接近法―西洋史を学ぶ』京都大学学術出版会，2010.
金澤（監修）・藤井他（編）『論点・西洋史学』ミネルヴァ書房，2020.

ギリシア・ローマに始まり，今日に至るヨーロッパ文明は，近世以降世界の諸文明に多大の影響を与えてきた。明治以降の日本の歴史もまた，絶大な影響を受けてきたことは言うまでもない。ヨーロッパや西洋文明世界の歴史を深く理解し，いかに解釈するかは，日本人にとって不可避の課題である。この課題を歴史学の立場から正しく果たすためには，一方では西洋人自身による豊富な研究成果を吸収する必要があり，他方では日本人の立場から，更にはグローバルな視野に立って，ヨーロッパや西洋文明世界の歴史の意味を明らかにすることが望まれる。

西洋史学専修は，4 人の専任教員が一体となって研究と教育に当たっている。小山教授は，ポーランド近世の政治文化を専攻している。金澤教授は，イギリス近代の政治と社会を専門分野としている。藤井准教授は，ヘレニズム期とローマ帝政期の政治、社会、宗教を専門としている。安平講師は，オランダ近世の宗教社会史を専攻領域にしている。学生・大学院生の専攻テーマは，こうした専任教員の専攻分野に縛られることなく，自由に選択されており，実に多様である。

次に西洋史関係の授業(講義・特殊講義・演習・実習・講読)について説明する。まず「講義」は「西洋史学序説」と題され，主に西洋における歴史学の発達や歴史意識の変遷，あるいは西洋史研究の実際の進め方などについて講じる。必須科目であり，2 回生で履修することが望ましい。「特殊講義」は各教員がそれぞれ専攻領域についての研究の結果をかみくだいて話すものである。専任 4 教員がこれを担当するほか，京都大学人文科学研究所や人間環境学研究科のスタッフおよび他大学からの非常勤講師によって，毎年ヴァラエティに富む講義が行われている。これらの特殊講義を数多く受講することによって，学生は西洋史上の重要な研究テーマについての高度の知識を習得するとともに，現在の学界における論争点や具体的な研究の方法などについて学ぶことができる。

「演習」は欧語文献をテキストとして用い，その読解，学生による報告と討論を行う。3 回生はまず各自の関心にしたがって「古代史」,「中世史」,「近世史」,「近代史」のいずれかの時代別演習に出席する。この演習には大学院生も専攻に分かれて出席し，報告と討論に参加する。3 回生はまた，「実習」に出席して西洋史学の研究方法を具体的に技術的なレヴェルから習得する。次いで，4 回生は全員「卒論演習」に出席し，卒業論文の中間発表を行う。それゆえ，3 回生の間に特殊講義や演習に出席しながら自分の関心の在りかを見定め，卒業論文のテーマをある程度しぼっておく必要がある。最後に,「講読」は「演習」とともに卒業論文の作成に必要な欧語文献の読解力を養うことを目的とするが，卒業要件としては，英・独・仏・露・伊の各国語のうちから少なくとも 2 つを(ただし，そのうち一つは英・独・仏・露書のいずれかを)履修しなければならない。また「講読」のうちの 1 科目を，学部共通科目のギリシア語，ラテン語，スペイン語(中級)のいずれかで履修することもできる。

さらに，1～2 回生の間にぜひ勉強しておいて欲しいことを記しておく。まず外国語の習得。西洋史の授業では欧語文献の読解が大きな比重を占める。英語以外に少なくとも 1 か国語を習得すること。古代史を専攻しようとする者は古典語，中世史の場合もラテン語が専門研究者になるためには習得が必要であり，近世以降のヨーロッパ諸国の研究を希望する場合も，その国の言語を学ばねばならない。余力があれば，これらも 2 回生，3 回生の間に始めておくことが望ましい。

なお，本専修専任教員が編集した書物『人文学への接近法　西洋史を学ぶ』(京都大学学術出版会)は，西洋史学を学ぶ意義や具体的な方法から留学や就職，参考文献まで説明しており，『論点・西洋史学』（ミネルヴァ書房）は西洋史学上の数多くの重要論点を簡便に網羅しているので，ぜひ参照されたい。 また，本専修の活動については，下記の専修ホームページが紹介している。https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/european_history/eh-top_page/

■ 考古学専修

教　授　　吉　井　秀　夫　　朝鮮考古学

教　授　　下　垣　仁　志　　日本考古学

〔著書･論文〕　吉井『古代朝鮮　墳墓にみる国家形成』，京都大学学術出版会，2010．同「朝鮮古蹟調査事業と「日本」考古学」『考古学研究』60-3，2013.

下垣『古墳時代の国家形成』吉川弘文館，2018．同『世界の初期文明』(翻訳)，同成社，2019.

考古学は，過去の人間が作り，使用した「物」を材料に，過去の人間の行動を研究する学問である。材料となる「物」は，主に発掘調査によって獲得する。したがって，考古学の研究を志す者は，まず，「物」から過去の人間の「行動」を復原する手法や知識，発掘調査によって必要な情報を獲得する手法や知識などを身につける必要がある。

考古学の研究対象は，人間生活の痕跡さえあれば，時間的･空間的な限定はない。厳密な発掘調査によって，さまざまな情報をもつ「物」データを集める。その「物」のあり方から直接「物質文化」を認識し，背後にある「精神文化」を読みとり，それらの個々の研究成果の統合をめざす。しかし，出発点となる厳密な発掘調査，「物」の観察･分析を系統的に行うことすら容易ではない。「物」を形態･製作技術･機能などで分類し(型式分類，形態分類)，各々のカテゴリーの時間的･空間的組み合わせを，定性的かつ定量的に検討した結果から，過去像を推察するのが考古学のオーソドックスな手法である。

しかし，現代の考古学では，たとえば動植物遺存体の遺伝子観察など，科学的でミクロな分析も，過去像の復原に大きな成果をもたらしつつある。考古学を学ぶ者は，自らその分析を実施する必要はない。だが，少なくとも，生物学･化学･物理学･地質学･土壌学など，自然科学分野の分析技術やその最新成果に深い関心を払う必要がある。資料の分析を自然科学者に託すとき，一体，何を求めるのかは考古学者の責任である。また，製作者･使用者の直接の証言を得られない考古資料を解釈する上で，歴史学･地理学･民俗学･民族学･文化人類学･社会学など，他の人文･社会科学分野の知識も学ぶ必要がある。

日本以外の地域を研究対象とする場合には，当然，その地域の言語を修得する必要がある。しかし，日本考古学を専攻する場合でも，ヨーロッパの言語，少なくとも英語力を鍛えることが大切である。外国の研究者の来日も頻繁となり，国際学会に参加して共同研究を進める機会も増えてくるからである。そうした集会や交流の場で，日常の研究成果を語り，他国の研究者の方法や成果に学ぶことは有意義であるばかりでなく，今後，避けて通れなくなるだろう。

考古学専修を希望する学生は，以下の点にも留意されたい。

①考古学は「物」を資料とする科学だから，「物」に親しみを持たねばならない。「物」についての観察や知識を広め，未知の「物」に対面した時にも，その材質や作り方，使い方を豊かに想像できるように訓練する必要がある。

②発掘は研究の基礎資料を獲得する場であるだけでなく，仮説検証の場，新たな問題を掘り起こす場でもある。発掘は遺跡の破壊だと言われるように，繰り返しのきかない実験でもある。当然，実施には細心の気配りが必要で，鋭い注意力を養う必要がある。また，発掘は知的な共同作業なので，体力だけでなく，バランスのとれた協調性や統率力も必要である。

③研究者の「眼」を養うには，「体」で覚えるのが早道である。まとまった休暇期間には，できる限り発掘に参加するのがよい。必ずしも条件のよくない合宿生活に耐える精神力を身につけるためにも，日頃から生活のリズムを整える努力をされたい。

④「物」を観察し，必要なデータをとる基礎訓練は考古学実習で身につける。三回生で自分の研究対象を見つけ，四回生で卒業論文を提出するためには，考古学実習を二回生のうちに履修するのが望ましい。

6. 行動･環境文化学系

行動･環境文化学系を構成するのは，心理学･言語学･社会学･地理学の 4 つの専修である。この 4 専修はそれぞれの専修の説明に述べられているように，いずれも固有の研究分野と研究方法をもち，確固とした学問的伝統を有している。しかしその一方で，人間の心理･言語活動･社会活動･空間活動に対する行動科学的アプローチを共有している。行動･環境文化学系は，このような 4 つの個別分野の特性を保持しつつ，共通の要素を軸として 1 つの系を構成することになったものである。

本系においては，心理学･言語学･社会学･地理学の各分野がそれぞれ独立しており，本系に分属を希望する学生諸君は，いずれの専修に進むのかを十分に考えておくことが望ましい。とりわけ本系を構成する各専修の場合，研究を進めていくためにはもとより，授業の内容を十分に理解するためにも，基礎的な技法･技術を修得することが不可欠である。各専修は 1 回生または 2 回生から，それぞれの分野の入門的講義や演習･実習･講読の必修科目を提供している。行動･環境文化学系に分属予定の学生諸君は，これらのどの科目を履修するかを考えておくことが必要である。

いずれの専修を選ぶにしても，まず必要なのは語学などの基礎的学力であり，1･2 回生のうちにこれらの勉強を進め，単位を修得しておくべきである。各専修の専門的教育はその基礎があってはじめて有効となる。

心理学･言語学･社会学･地理学はそれぞれ研究室を構成し，3 回生以降における専修分属の単位となっている。それぞれの専修における教育を担当し，卒業論文の作成指導をするのはこれらの研究室である。各研究室には，担当の教員の下に多くの大学院生が所属して研究を進めている。必要があれば上級生および大学院生からの助言も得られよう。

■ 心理学専修

教　授	蘆　田　　宏	視覚科学　(感覚情報処理･視覚認知)
教　授	黒　島　妃　香	比較認知科学　(動物，知性，感情，進化)
准教授	森　口　佑　介	発達科学　(認知発達，脳発達，自己制御，想像力，経験)
講　師	Duncan A. Wilson	比較心理学・霊長類学

〔著書･論文〕

蘆田「PsychoPy でつくる心理学実験」(監訳、共著) 朝倉書店，2020；蘆田「運動の知覚」(吉澤達也編 感覚知覚の心理学 第 7 章) 朝倉書店，2023

黒島「Does own experience affect perception of others' actions in capuchin monkeys (Cebus apella)? *Anim Cogn* (2014, 共著)；「誤解だらけの”イヌの気持ち」(4 章) 財界展望新社，2015；「Experience matters: Dogs (Canis familiaris) infer physical properties of objects from movement clues.」(*Behav Processes*) (2017, 共著).

森口「自分をコントロールする力　非認知スキルの心理学」講談社新書, 2019；「おさなごころを科学する：進化する乳幼児観」新曜社，2014

Wilson 「Exploring attentional bias towards threatening faces in chimpanzees using the dot probe task.」 *PLoS ONE* (2018, 共著)

人の心のはたらきについては，古くよりさまざまな観点から考究されてきているが，心理学は，行動観察を基礎に，心のはたらきを実証的に研究する科学である。心理学は広範な応用分野をもつが，本専修は，基礎心理学，実験心理学，および基礎行動学の 3 分野で構成され，認知を中心とする基礎的領域を扱っている。これらの 3 分野は相互に密接な関連をもち，一体となって心理学の研究･教育に当たる方針を貫いている。主な研究内容として，巨視的に個体を単位として，その発達や系統発生，個体間相互作用などを対象とする研究，感覚，知覚，記憶，思考，情意などの機能のそれぞれについて，より緻密に分析するとともに，生涯におけるその変化について調べる研究，神経科学や情報工学，分子生物学など精神活動の解明に関わる隣接諸科学との相互作用を通じて，認知機能を解明しようとする研究，などが挙げられる。百年余り前に哲学から分かれて，独自の道を歩み始めた心理学の研究･教育に携わる本専修は，文学部の諸専修のなかでやや異色の趣きがある。観察材料や測定器具を配し，ハトや新世界ザルを擁した実験室は，一見，文学部らしからぬ様相を呈している。これは本専修が実験心理学を根幹とする基礎部門を主要な研究課題としていることに依る。こうした性質上，臨床心理学，精神分析学等を本専修に求めても，それらに応える十全の準備はない。しかし，本専修は京都大学「こころの科学ユニット」(https://www.kokoro-unit.kyoto-u.ac.jp/)に参加しており，教育学部，総合人間学部で開講されている数多くの科目が相互的に履修可能である。これらの多様な科目を履修し視野を広げることは大いに推奨される。

他の科学と同様に，心理学においても基本的に理論と事実の整合性が要請されることはいうまでもない。理論は事実による裏づけを要し，事実は理論に収斂される。専修生はそうした整合性をたかめるための基礎的な訓練を通して，心理学的なものの見方を習得するはずである。そのためには本をよく読み，よく考え，さらによく観察する態度が必須のものである。学部学生の指導には，演習にかなりの重点がおかれ，各自が問題の所在を原典によって探究することが要求される。したがって専修分属に先立ち，語学力をたかめ，さらに柔軟な思考力を涵養しておくことが要請される。あわせて，第 2 年次に履修できる授業(文学部学生便覧参照)，特に講義Ⅰ (実験心理学概論)，実習Ⅱ A, B (心理学基礎実験)，実習Ⅱ A, B (統計基礎実習)を履修しておくことが，カリキュラム上からも強く望まれる。このほか学部での授業には知覚，学習，思考，発達，社会などの各領域にわたる講義や研究，観察･調査のデータを解析し，集約する心理学的方法を習得する授業が提供されている。また，大学院では，各自のテーマをさらに発展させ，その営為を通して母なる哲学に改めて問いかける幅の広さを期待したい。

本専修では，他学部との連携により公認心理師受験に必要な科目を修得できるようにしている。詳しくは京都大学公認心理師情報ページ(https://www.educ.kyoto-u.ac.jp/kounin-cp)を参照されたい。なお，文学研究科では大学院修士課程レベルの科目は提供されないので，受験資格の取得には，卒業後に他の研究科への進学あるいは特定の機関での実務が必要となる。

本専修では読書と思索のみに耽る，いわゆる「安楽椅子の心理学」の志向は歓迎し難い。卒業論文には，手足を動かしてデータを得，解析し，事実の背後にひそむ力動的な機制を描き出す洞察が期待される。そうした労を惜しむ学生には本専修はそぐわない。しかし，人や動物の多様な活動にみられる自然のあり方に関心があれば，心理学専修はやり甲斐のある研究テーマに満ちている。

■ 言語学専修

教　授　　定　延　利　之　　記述～理論言語学，日本語
教　授　　千　田　俊太郎　　記述言語学，パプア諸語，朝鮮語，エスペラント
准教授　　キャット，アダム　　印欧諸語歴史言語学，古期インド･イラン諸語，トカラ語
講　師　　大　竹　昌　巳　　文献言語学，契丹語

〔著書･論文〕 定延利之『認知言語論』(大修館 2000)，同『ささやく恋人，りきむレポーター』(岩波書店 2005)，同『煩悩の文法』(筑摩書房 2008)，同『コミュニケーションへの言語的接近』(ひつじ書房 2016)，同『文節の文法』(大修館書店 2019)，同『コミュニケーションと言語におけるキャラ』(三省堂 2020).

千田俊太郎「日本語の動詞語幹とアクセントに關する覺え書き」『ありあけ：熊本大学言語学論集』19, 2020, 同「ドム語の「一」を表はす形式とその用法について――同一性，唯一性，非現實性，個々別々性，不定性，特定性――」『言語記述論集』12, 2020, Kial multas adjektivoj en Esperanto? Komparo kun la korea, la japana, Dom, Tokpisino kaj aliaj lingvoj. *Esperantologio / Esperanto Studies* 3(11), 22–54, 2022.

キャット，アダム　The Derivational Histories of Avestan *aēsma-* 'firewood' and Vedic *idhmá-* 'id.' In Stephanie Jamison, H. Craig Melchert, and Brent Vine (eds.), *Proceedings of the 25th Annual UCLA Indo-European Conference*, 39–48. Bremen: Hempen, 2014. 同 Tocharian B *ly(ī)ptsentar-* A New Class VIII Present. *Tocharian and Indo-European Studies* 17: 11–27, 2016. 同 Vedic *vrādh-* and Avestan *uruuād-/uruuāz-*. In Adam Alvah Catt, Ronald I. Kim, and Brent Vine (eds.), *QAZZU warrai: Anatolian and Indo-European Studies in Honor of Kazuhiko Yoshida*, 21–33. Ann Arbor: Beech Stave, 2019.

大竹昌巳 "Reconstructing the Khitan vowel system and vowel spelling rule through the Khitan Small Script", *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 70(2), 2017, 同「契丹小字文献における「母音間の g」」『日本モンゴル学会紀要』46, 2016，同「契丹小字文献における母音の長さの書き分け」『言語研究』148, 2015.

言語学専修は，1908 年に京都大学文学部に言語学の講座が設置されたことに遡る。初代の教授は『広辞苑』の編者として知られる新村出であった。開設以来，本専修では個々の言語を調査･分析し記述する研究や，文献を読み解き，言語の変化や文献以前の言語について推定する研究において多くの貢献をしてきている。またそこで得られる知見を一般化した，一般言語学の分野でも重要な役割を果たしてきた。それに加えて昨今では，人間の言語が機能する仕組みについての理論的な研究の面でも多くの人材を輩出している。

本専修では，創設以来文献言語学と歴史言語学の分野において着実な研究成果を上げてきている。希少な文献を読み解き内容を明らかにすることは，人類の歴史の解明につながることはもとより，言語の変化を知るうえでも重要な作業である。昨今は正規の発掘だけでなく，世界で盛んに行われる開発工事の結果として新しい文字資料が発見されてきており，このような新出資料の解明もまた言語学に携わる者の重要な仕事となっている。また情報化･国際化の波により世界が大きく変貌する中にあって，本専修に対する一般社会や学界の期待は，ますます増大しつつある。地球上で話されている数千の言語のうちのかなりのものが，国際化の中で話者の数が減り死語となる危機に瀕している。それらを体系的に記述する作業は緊急の課題である。それはまた，地上で失われつつある「種」の保存にも比較できる，現在に生きる我々の使命であるが，言語学の訓練を受けた研究者だけが十全に行い得る仕事である。さらに，人間が言葉を生成しコミュニケーションを行う仕組みを解明する研究は，情報工学や大脳生理学などの分野を巻き込んだ真に学際的な研究分野になっており，言語の本質についての研究の蓄積と言語分析のノウハウを有する言語学者の果たす役割は非常に大きい。

このように言語学が扱う領域は極めて広いが，カリキュラムの編成にあたっては専任の教員および非常勤の教員を適切に配して，音声学，記述言語学，理論言語学，歴史･比較言語学，社会言語学など現代言語学のほとんどの領域をカバー出来るように配慮している。また卒業に必要な科目として，東洋西洋諸語 16 単位を課しているが，これは，将来どの言語を専門にするにしても，多くの言語の特徴を理解したうえで言語研究を進めていくことが必要であるからである。そうして得られた知識を背景にして卒業論文を準備することになる。

卒業論文のテーマは日本語を対象にした理論的研究をはじめとして，歴史言語学，音声学，フィールド言語学など言語学の多様な分野に及んでいる。現在話されているか否かを問わず，希少な個別言語の分析がテーマとして選ばれることが比較的多いことも本学の言語学専修の伝統であろう。

研究室の雰囲気は大変明るく，学部学生も自由に出入りして院生たちと交流している。院生の指導による学部学生のための研究会や読書会も盛んに行われている。年 3 回行われる言語学懇話会では，各方面で活躍する卒業生や院生の研究成果に親しく接することができ，その後で行われる懇親会も含めて学部学生も積極的に参加している。研究室は研究面での交流を進めるとともに，人間的な友好を深める場でもあるよう努めている。

■ 社会学専修

教　授　　太郎丸　　博　　社会階層論，数理社会学，社会学方法論
教　授　　岸　　政　彦　　沖縄、生活史、質的調査方法論
准教授　　田　中　紀　行　　社会学史，社会学理論，知識社会学
准教授　　Stéphane Heim　　経済社会学，産業社会学，組織論
准教授　　丸　山　里　美　　ジェンダー研究，福祉社会学
(兼)准教授　安　里　和　晃　　移民研究，アジア研究，社会福祉論

〔著書･論文〕　太郎丸『人文･社会科学のカテゴリカル･データ解析入門』ナカニシヤ出版，2005,『フリー ターとニートの社会学』世界思想社，2006,『講座社会学 13 階層』東京大学出版会，2008 (共著)，若年非正規雇用の社会学』大阪大学出版会，2009.

岸『同化と他者化――戦後沖縄の本土就職者たち』ナカニシヤ出版、2013 年,『断片的なものの社会学』朝日出版社、2015 年,『マンゴーと手榴弾――生活史の理論』勁草書房、2018 年,石岡丈昇・丸山里美共著　『質的社会調査の方法――他者の合理性の理解社会学』有斐閣、2016 年,北田暁大・筒井淳也・稲葉振一郎共著　『社会学はどこから来てどこへ行くのか』有斐閣、2018 年,打越正行・上原健太郎・上間陽子共著　『地元を生きる――沖縄的共同性の社会学』ナカニシヤ出版、2020 年,岸政彦編著　『東京の生活史』筑摩書房、2021 年,岸政彦編著　『生活史論集』ナカニシヤ出版、2022 年,石原昌家・岸政彦監修　沖縄タイムス社編　『沖縄の生活史』みすず書房、2023 年

田中『近代日本文化論 4　知識人』岩波書店，1999 (共著),『歴史社会学とマックス･ヴェーバー (上)』理想社，2003 (共著),『モダニティの変容と公共圏』京都大学学術出版会，2013 (共編著) ,『W. シュルフター著作集 5 マックス・ヴェーバーの比較宗教社会学』風行社，　2018(監訳).

Heim “Economic Sociology and the Theory of the Firm: Lessons from the “Toyota Momentum” in the History of Capitalism”, *Kyoto Journal of Sociology*, Vol. 24, pp. 83-93, 2016, “Biopolitics and bureaucracy. The tragedy in three acts of the decay of Japanese national universities”, *Savoir/agir*, Vol. 37, No.3, pp. 107-113, 2016

丸山『女性ホームレスとして生きる――貧困と排除の社会学』世界思想社, 2013, 『質的社会調査の方法――他者の合理性の理解社会学』有斐閣, 2016(共著), 『貧困問題の新地平――〈もやい〉の相談活動の軌跡』旬報社, 2018(編著), *Living on the Streets in Japan: Homeless Women Break their Silence*, Trans Pacific Press, 2019

安里『労働鎖国ニッポンの崩壊』ダイヤモンド社，2011(編著), “Nurses from Abroad and the Formation of a Dual Labor Market in Japan”*Southeast Asian Studies*, Vol. 49, No.4, : 642-669,2012(共著),『親密圏の労働と国際移動』京都大学出版会，2018(編著)。

社会学専修は社会学と社会人間学，比較文化行動学および比較社会学の各分野から構成されている。比較社会学は,現在立命館大学の筒井淳也教授が客員教授として文化社会学を担当している。学部教育は社会学･社会人間学･比較文化行動学の各分野で実施され，相互に緊密に結びついて社会学専修のカリキュラムを構成している。また，大学院との共通講義を学ぶことができる。

社会学専修の研究･教育の根幹は，社会学理論の習得におかれている。したがって学生は社会学史ならびに社会学諸理論の研究を通じて，社会学の基本的な考え方を身につけることが要請される。そのうえで特に力を入れているのが，具体的なデータに基づく社会と社会生活の実証的･批判的分析である。社会学分野では歴史資料を駆使した近代社会や家族の生成過程の分析，社会人間学分野ではカルチュラル･スタディーズの手法を用いた現代社会の矛盾の解明及び数理モデル，計量的手法を用いた階層･格差の分析，比較文化行動学分野においてはフィールドワークやディープインタビューの手法を取り入れたコミュニティの実証研究を特色としている。授業は文学部だけでなく，京都大学で社会学を研究する他学部･研究所に所属する多数の教員の協力によっても行われる。また毎年国内外の大学からも多彩な非常勤講師を招いている。年度によってテーマや講師の顔ぶれは交替するが，社会調査法，福祉，メディア，医療，国際移動，地域社会，家族，現代社会理論などの個別領域の研究が提供されている。

社会学を選択する学生には，海外の文献を読みこなすのに十分な語学力と，それを厳密に理解し分析する理論的能力が要求される。さらに具体的な問題意識をもって文献を踏査し経験的な調査を自ら実行する能力も期待される。社会学的な考え方を学びながらあくまでも具体的なテーマに知的好奇心を失わない学生を歓迎する。

■ 地理学専修

教　授　　米　家　泰　作　　歴史地理学，東アジアの環境史

准教授　　埴　淵　知　哉　　都市地理学，健康地理学

講　師　　杉　江　あ　い　　社会地理学，開発地理学，地域研究（南アジア）

〔著書･論文〕

米家『中･近世山村の景観と構造』，校倉書房，2002. 『モダニティの歴史地理』(共訳)，古今書院，2005. 『森と火の環境史』，思文閣出版，2019.

埴淵『社会調査で描く日本の大都市』(編)，古今書院，2022. 『地域と統計―〈調査困難時代〉のインターネット調査』(共編)，ナカニシヤ出版，2018. 『社会関係資本の地域分析』(編)，ナカニシヤ出版，2018.

杉江 "Solidarity economy versus neoliberalism?: microcredit in rural Bangladesh." *Journal of Business and Economics* Vol. 10, No. 9, 2019. "Do 'Islamic norms' impede inclusive development of women?: A case study of Islamic education for women in rural Bangladesh," In Awaya, T. and Tomozawa, K. eds. *Inclusive Development in South Asia*, Routledge, 2023. 『カースト再考―バングラデシュにおけるヒンドゥーとムスリム』，名古屋大学出版会，2023.

当専修は，海外地域研究を含む地理学の幅広い領域の研究と教育の場です。そのため，上記の専任教員に加え，他部局の先生方には学内講師として，学外からも非常勤講師の先生方に授業を依頼し，多様な講義の提供に努めています。

地理学専修の研究や教育の特色の 1 つは，通時的な視点と相対比較の問題意識を重視することです。現在の場所･空間･環境にかかわる諸現象を捉える場合にも，その現在へと至る形成過程に目を向け，また，常に内外諸地域の比較研究を目指し，多面的かつ複合的に地域性を追求します。また，もう 1 つの特色は，「実習」の重視です。そのため，調査や論文作成に必要な，読図や GIS(地理情報システム)，フィールドワークの技術や調査方法を実際に体得する「地理学実習」を開講しています。この授業では，参加学生たちの合議で調査地を決め，全員の調査結果をまとめて『実習旅行報告書』として刊行しています。

地理学は，地球上での人間の営みや自然との関わりを，景観・環境・場所・地域・空間といった観点から，多様なスケールで捉える分野です。地理学らしい地図や空間への意識を持ちながら，関連する研究領域にも幅広く目を向け，論理的な思考力を養うことが期待されます。また，英語をはじめとする外国語の論文や資料も積極的に利用して，卒業研究に活かすことが望まれます。歴史地理学の分野では，古文書の解読が必要な場合もあります。

卒業論文の作成は，自分の関心に関連する研究論文を探して精読し，研究テーマや対象地域を決め，調査法や分析手法の選定，調査や分析の実施，図表の作成，論文執筆に至るという一連のプロセスを含みます。演習Ⅰ(3 回生)と演習Ⅱ(4 回生)は，こうした卒業論文の作成に向けたもので，個々の発表に基づく受講生同士の議論も，教員のアドバイスやサポートを受けることも大切な部分です。

なお，地理学専修は，1907 年の教室創設以来，さまざまな民族資料，古地図，アトラス，内外の地形図類などを収集してきました。これらは，総合博物館地理作業室，古地図･古地誌収蔵室，および地図･民族資料研究展示室に収蔵･管理されています。こうした資料も，研究と教育にさまざまな形で活用されています。

京都大学地理学教室所蔵の絵葉書コレクション　https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geography/postcard/

7. 基礎現代文化学系

基礎現代文化学系は，科学哲学科学史専修，メディア文化学専修，現代史学専修の 3 つから構成されている。

科学哲学科学史専修は，「科学とは何だろうか」という問いに，主に哲学と科学史の 2 つの分野の手法を用いつつ答えることを目指している。科学哲学は哲学の伝統的な問題意識を科学に当てはめたり，科学の営みの中で生じる概念的問題を考察したりすることでこの問いに迫る。科学史は科学の学説史や科学・技術をめぐる社会史などを検討することで科学の成り立ちを考える。この両者が組み合わさる学際的なアプローチが当専修の特徴である。

メディア文化学専修は，現代におけるメディアの高速化・大規模化・廉価化・大衆化・グローバル化により生み出された，国や地域を超えた新たな文化・価値観・生活様式にかかわるさまざまな問題を考察する。本専修の教育の大きな特徴は、従来の人文・社会科学の手法に基づきつつ、新しい事象を扱うためにこれまでになかった分析視点や他分野の手法なども積極的に採り入れる点にある。

現代史学専修は，旧史学科の現代史学講座として設置され，一次史料の分析に基づく歴史学の方法論をとる。一方で，様々な国や地域の間の様々な影響関係を考察することなくして現代という時代を把握することは出来ないという視点に立ち，現代史を世界史として把握することを目指している。したがって，日本を含む特定の国の歴史を分析する場合にも，常に世界史的な位置づけや相関関係を考察することが求められる。

各専修は，1 回生から受講できる入門的な内容の系共通科目講義を提供している。また，基礎現代文化学系全体では，基礎現代文化学系ゼミナール（現代文化学系の大学院修了者によるリレー講義）を開講している。各専修の専門科目である講読・特殊講義・演習・基礎演習の中には，2 回生から履修できる科目もある。1・2 回生のうちにこれらを受講して，各専修の研究内容を知ってほしい。また，専修分属後に専門的な研究を進めるためには，系共通科目の講読を 2 回生から 3 回生の間に履修しておくのが望ましい。分属希望者が専修の収容人員を上回った場合には，各専修が 1・2 回生の時の成績等によって選考を行うことがある。

■ 科学哲学科学史専修

教　授　伊勢田　哲　治　科学哲学，社会認識論，検証理論，科学実在論，社会科学の哲学，認識論，科学技術倫理
准教授　伊藤　憲二　科学技術史，知識のグローバル・ヒストリー

〔著書･論文〕伊勢田『認識論を社会化する』(名大出版会　2004)，同『疑似科学と科学の哲学』(名大出版会　2003)，『科学哲学の源流をたどる』（ミネルヴァ書房, 2018），伊勢田ほか編『科学技術をよく考える』(名大出版会 2013)

伊藤 『励起：仁科芳雄と日本の現代物理学』（みすず書房 2023 年 7 月出版予定）；“Transnational Scientific Advising: Occupied Japan, the United States National Academy of Sciences,” *The British Journal for the History of Science,* online, 2023: 1-15; “Early Japanese Reactions to the Interpretation of Quantum Mechanics, 1927-1943,” pp. 687-707, in Olival Freire, Jr. ed, *Oxford Handbook of the History of Quantum Interpretations* (Oxford University Press, 2022); “The Scientific Object and Material Diplomacy: The Shipment of Radioisotopes from the United States to Japan in 1950,” *Centaurus* 63(2), 2021: 296-319.

現代社会が高度科学技術社会と特徴づけられるように，科学は現代の社会のみならず文化の基底を構成しており，その理解は，専門家のみならず，非専門家にとっても非常に重要な課題である。しかし現代科学が高度な専門化している結果，各分野の専門家は，非常に細分化された研究に携わっており，そのために専門家には科学の全体像はむしろ洞察しづらくなっている。本専修では，「科学とは何だろうか」という問いに哲学や歴史学といった人文社会系の学問の視点から答えることを目指す。

現代の科学哲学の研究対象は科学そのものと同じほど多様であるが，その中心となるのは，「科学的説明」，「仮説の確証」，「科学的実在論」，「科学の転換」といったテーマである。しかし数学の哲学，物理学の哲学，生物学の哲学，あるいは社会科学の哲学というように，ある程度研究分野を限定し，その分野での専門的な研究内容に即した哲学的問題を取り扱うこともできる(たとえば，相対性理論における時間と空間の概念，量子力学における因果性，生物学的種の概念，階級の実在性のように)。また論理学と数学の基礎，確率と統計の哲学，心の哲学といった重要な分野もある。いずれのテーマを研究するにしても，そのために必要なのは，問題把握のセンス，論理的な分析能力と，選んだ研究テーマに関して具体的な専門知識を掘り下げていく根気である。また科学的営みや知識を分析対象とする以上，科学に関する具体的知識を欠いた研究は不毛であるといえよう。

科学史研究は，さまざまな地域・時代における知識生産の歴史学的研究を通して，科学と呼ばれる知識実践が立ち現わる過程を明らかにし，科学についての理解を深める学問である。知識実践は個人の脳内で完了するものではなく，分散化されたな認知を含む社会的な営みであり，そこでは人間とその集団だけでなく，認識の対象やその環境，認知のための物質的・社会的装置など人間以外のアクターも作動する。様々な知識実践のうち，あるものが科学として境界が設定されるのも，これらのアクターの織り成す社会的・歴史的過程である。また，科学と密接に関連する「自然」，「事実」，「正常性」，「客観性」，「科学者」なども同様に歴史的過程をへて分節化され，制度化される。科学史はこの過程を理解することを目指すが、そのためには知識内容に加え，具体的な知識実践とその実践者，その文化やインフラストラクチャー，それらが正当化され，伝播されたり，されなかったりする社会的な仕組み，そしてその歴史的な発展のメカニズムも研究の対象となる。また普遍性を標榜し，志向し続ける科学を考える上で，西洋中心主義・男性中心主義にとらわれないグローバルな視点やジェンダー観点も欠かせない。このように科学史の研究は豊富な内容を持ち，分野を越えた複数の学問的方法の組み合わせによって実践されているため，様々な素養を生かした多様なテーマ設定が可能であり，多様な知的関心にこたえることができる。

近年では科学哲学･科学史は「科学技術社会論」(STS)と呼ばれる，より広い学際的分野の一部と見なされることが多くなってきた。STS では，社会学や心理学などの研究手法も用いられ，また研究対象も狭い意味の科学に限らず，技術に分類されるものや，科学と社会の接点において生じる問題なども対象となる。本専修の軸足は(特に大学院においては)あくまで科学哲学と科学史にあるものの，学部レベルでは，STS も含めた広い意味で「科学とは何だろうか」という問いにアプローチする研究も歓迎する。

本専修の卒業論文のリストは専修ウェブサイトで公開しているので参照されたい。

https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/philosophy_and_history_of_science/phs-student-gradtheses/

■ メディア文化学専修

教　授　　喜　多　千　草　　コンピューティング史，現代技術文化史，現代文化学

准教授　　松　永　伸　司　　分析美学，ゲーム研究，現代文化学

教　授(兼)　ミツヨ・ワダ=マルシアーノ　映画研究，メディア研究

〔著書･論文〕 喜多　『インターネットの思想史』(青土社，2003)；『起源のインターネット』(青土社，2005)；「『社会的責任を考えるコンピュータ専門家の会（Computer Professionals for Social Responsibility)』の成立と発展」『史林』101 巻 1 号（2018）

松永　「キャラクタは重なり合う」フィルカル 1 巻 2 号（2016）；『芸術の言語』(ネルソン・グッドマン著，慶應義塾大学出版会，2017) (共訳)；『ビデオゲームの美学』(慶應義塾大学出版会，2018)

ワダ=マルシアーノ　*Japanese Filmmakers in the Wake of Fukushima: Perspectives on Nuclear Disasters* (Amsterdam: Amsterdam University Press, 2023)（著書）.;『＜ポスト 3.11＞メディア言説再考』(法政大学出版局，2019)(編著)、『No nukes：「ポスト 3・11」映画の力・アートの力』(名古屋大学出版会，2021)

メディア文化学専修は，情報・史料学専修と二十世紀学専修が合併することにより，2018 年度に発足した新しい専修です。この新専修の理念・目的を以下に紹介します。

現代はメディアの高速化・大規模化・廉価化・大衆化・グローバル化が著しく、文化や情報は短時間のうちに伝播拡散し、それにより国や地域を超えた新たな文化・価値観・生活様式が生み出されています。しかし、同時に従来の文化・国家・制度も存続しており、社会的規範や歴史認識などをめぐる新たな政治的・文化的な軋轢を生みだしています。

本専修では、こうした現代特有のメディアや文化事象にかかわるさまざまな問題を考察します。本専修の教育の大きな特徴は、従来の人文・社会科学の手法に基づきつつ、新しい事象を扱うためにこれまでになかった分析視点や他分野の手法なども積極的に採り入れる点にあります。そのため本専修では、歴史学・哲学・社会学・文学に加えて、マンガ学、ゲーム学、人文学系の情報学などの科目が用意されています。

本専修での研究テーマはジェンダー表象、視覚文化、ファッション、ゲームなど多岐に渉りますが、所属学生には各々の研究テーマに即した方法論を自ら切り拓く気概が求められます。

本専修のカリキュラムは，令和 2 年度より大きく変更されましたので，分属希望者は必ず専修のガイダンスに参加してください。

■ 現代史学専修

教　授　　小 野 沢　　透　　アメリカ現代史・国際関係史

教　授　　塩　出　浩　之　　日本近現代史

〔著書･論文〕小野沢“Formation of American Regional Policy for the Middle East, 1950 – 1952,” *Diplomatic History*, Vol.29, No.1, Jan, 2005； “The Search for an American Way of Nuclear Peace：The Eisenhower Administration Confronts Mutual Atomic Plenty,” in *The Japanese Journal of American Studies*, No. 20, 2009.『幻の同盟―冷戦初期アメリカの中東政策』（上・下，名古屋大学出版会, 2016 年）.「「同時代」と歴史的時代としての「現代」」『思想』No.1149 （2020 年 1 月，岩波書店）.

塩出 『岡倉天心と大川周明 「アジア」を考えた知識人たち』(山川出版社，2011 年).『越境者の政治史 アジア太平洋における日本人の移民と植民』(名古屋大学出版会，2015 年).『公論と交際の東アジア近代』(編著，東京大学出版会，2016 年)

現代史学専修は，1966 年に旧史学科の一講座として設立された，文学部の中では比較的新しい専修である。

現代史学専修は，「現代」という時代が，それ以前の時代とは異なる歴史的動態を有し，それゆえに，この時代を研究するためには，特定の国や地域を対象とする伝統的な歴史学とは異なる分析上の視点やアプローチが必要とされるという立場に立って研究・教育を行っている。19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて，アジア・アフリカ地域が欧米を発祥とする主権国家の国際システムに取り込まれ，あるいは欧米列強の公式・非公式の支配下に入ったことで，地球上のすべての地域が相互に結びつけられ，「ひとつの世界」が出現した。近代以前にも遠隔地域間の交易や情報の伝播は見られたが，19 世紀後半以降に出現した「ひとつの世界」では，ヒト・モノ・カネ・情報などの国・地域を越えた移動や伝播は恒常的なものとなり，その速度と規模は，21 世紀の今日に至るまで，様々な曲折を経ながらも増大し続けている。この「ひとつの世界」は，地域を越えた人や社会の連携や相互依存を促進する一方で，新たな分断や対立をも引き起こしてきた。たとえば，地球上のほぼすべての土地が主権国家と植民地という制度のもとに分割されたことによって，それ以前の人的・経済的な結合が断ち切られる事態，あるいは対立しあう「国益」を追求するために国家が人的・物的資源を大規模に動員する事態も，逆接的ではあるが，「ひとつの世界」が出現したことの帰結であった。現代史学専修は，人類の歴史が「ひとつの世界」の世界史として展開するようになった時代を「現代」と捉え，この「現代」に生起する様々な歴史的事象を世界史的な視野から分析し考察することを目指している。

現代史学専修の研究と教育は，分析対象の当事者や同時代の観察者が残した一次史料の精確な読解を考察の出発点に据える，実証的な歴史学の方法論を取る。現代史の研究では，オーラル・ヒストリーや図像・映像をも史料として用いることがあるが，それらについても，文字史料と同様に厳密な史料批判と合理的な解釈が必要とされる。本専修の特徴は，一次史料から得られた知見を，能う限り世界史的な文脈に位置づけて考察しようとする点にある。そのためのアプローチは，無限にあると言ってよい。たとえば，国際関係史や比較史のアプローチ，あるいはトランスナショナルな視点を導入することが有効なこともあるし，ナショナリズム，ポストコロニアル，ジェンダーなど，社会・政治・思想などに関する様々な理論を援用することで複雑に絡まりあう事象を解きほぐすのが容易になることもあろう。

本専修で学ぶ学生には，史料の読解に必要とされる言語を含む，複数言語の修得が必要とされる。卒業論文のテーマは，自由に選択してよいが，研究対象の一次史料を入手できることが条件となる。本専修は世界各地の現代史に関する多彩な特殊講義や演習を幅広く開講しているが，これらの授業だけで現代史のすべての事象や問題をカヴァーすることは到底できない。現代史を学ぶ学生には，他専修や他学部の授業，そして何よりも幅広い読書を通じて，世界史的な知識と視野を獲得するよう努めてほしい。

（資料）系及び専修に関する内規

昭和 35 年 5 月 9 日制定
平成 16 年 12 月 16 日改正
平成 25 年 2 月 18 日改正
平成 29 年 5 月 25 日教授会改正

1． 平成 16 年度から 23 年度の入学者

1）1 年次の 10 月に志望する系の届出を必ずしなければならない。
2）志望する系の届出期日は毎年 9 月下旬に掲示する。
3）2 年次の 10 月に志望する専修の届出を必ずしなければならない。
4）志望する専修の届出期日は毎年 9 月下旬に掲示する。
5）各系及び専修は次表のとおりであり，各専修の収容人員は同表を基準として決定する。なお，この内規でいう収容人員とは，1 学年あたりの受入可能数である。

哲学基礎文化学系	
哲学専修	10 名
西洋哲学史専修	20 名
日本哲学史専修	10 名
倫理学専修	10 名
宗教学専修	10 名
キリスト教学専修	10 名
美学美術史学専修	20 名
東洋文化学系	
国語学国文学専修	20 名
中国語学中国文学専修	20 名
中国哲学史専修	10 名
インド古典学専修	20 名
仏教学専修	10 名
西洋文化学系	
西洋古典学専修	10 名
スラブ語学スラブ文学専修	10 名
ドイツ語学ドイツ文学専修	10 名
英語学英文学専修	20 名
アメリカ文学専修	10 名
フランス語学フランス文学専修	20 名
イタリア語学イタリア文学専修	10 名
歴史基礎文化学系	
日本史学専修	20 名
東洋史学専修	20 名
西南アジア史学専修	10 名
西洋史学専修	20 名
考古学専修	10 名
行動･環境文化学系	
心理学専修	20 名
言語学専修	20 名
社会学専修	20 名
地理学専修	20 名
基礎現代文化学系	
科学哲学科学史専修	10 名
情報･史料学専修	10 名
二十世紀学専修	10 名
現代史学専修	10 名

6）専修志望者数が上記の基準を超過し，選考を行うときは，2 年次までの学業成績その他を勘案する。
7）所属系及び専修が決定しない者は，2 年次及び 3 年次以降に配当された本学部学部科目を履修することができない。
8）所属系及び専修は 11 月に決定し，翌年 4 月 1 日に分属する。
9）分属後の専修の変更の願出期日は毎年 1 月とする。
10）転学部(転入)の願出期日は毎年 10 月上旬に掲示する。

２．　平成 24 年度から平成 27 年度の入学者

1）1 年次の 10 月に志望する系の届出を必ずしなければならない。

2）志望する系の届出期日は毎年 9 月下旬に掲示する。

3）2 年次の 10 月に志望する専修の届出を必ずしなければならない。

4）志望する専修の届出期日は毎年 9 月下旬に掲示する。

5）各系及び専修は次表のとおりであり，各専修の収容人員は同表を基準として決定する。なお，この内規でいう収容人員とは，1 学年あたりの受入可能数である。

哲学基礎文化学系	
哲学専修	10 名
西洋哲学史専修	20 名
日本哲学史専修	10 名
倫理学専修	10 名
宗教学専修	10 名
キリスト教学専修	10 名
美学美術史学専修	20 名
東洋文化学系	
国語学国文学専修	20 名
中国語学中国文学専修	20 名
中国哲学史専修	10 名
インド古典学専修	20 名
仏教学専修	10 名
西洋文化学系	
西洋古典学専修	10 名
スラブ語学スラブ文学専修	5 名
ドイツ語学ドイツ文学専修	10 名
英語学英文学専修	20 名
アメリカ文学専修	10 名
フランス語学フランス文学専修	20 名
イタリア語学イタリア文学専修	10 名
歴史基礎文化学系	
日本史学専修	20 名
東洋史学専修	20 名
西南アジア史学専修	10 名
西洋史学専修	20 名
考古学専修	10 名
行動･環境文化学系	
心理学専修	20 名
言語学専修	20 名
社会学専修	20 名
地理学専修	20 名
基礎現代文化学系	
科学哲学科学史専修	10 名
情報･史料学専修	5 名
二十世紀学専修	5 名
現代史学専修	10 名

6）専修志望者数が上記の基準を超過し，選考を行うときは，2 年次までの学業成績その他を勘案する。

7）所属系及び専修が決定しない者は，2 年次及び 3 年次以降に配当された本学部学部科目を履修することができない。

8）所属系及び専修は 11 月に決定し，翌年 4 月 1 日に分属する。

9）分属後の専修の変更の願出期日は毎年 1 月とする。

10)転学部(転入)の願出期日は毎年 10 月上旬に掲示する。

３．　平成 28 年度以降の入学者

1）1 年次の 10 月に志望する系の届出を必ずしなければならない。

2）志望する系の届出期日は毎年 9 月下旬に掲示する。

3）2 年次の 10 月に志望する専修の届出を必ずしなければならない。

4）志望する専修の届出期日は毎年 9 月下旬に掲示する。

5）各系及び専修は次表のとおりであり，各専修の収容人員は同表を基準として決定する。なお，この内規でいう収容人員とは，1 学年あたりの受入可能数である。

哲学基礎文化学系

哲学専修	10 名
西洋哲学史専修	20 名
日本哲学史専修	10 名
倫理学専修	10 名
宗教学専修	10 名
キリスト教学専修	10 名
美学美術史学専修	20 名

東洋文化学系

国語学国文学専修	20 名
中国語学中国文学専修	20 名
中国哲学史専修	10 名
インド古典学専修	20 名
仏教学専修	10 名

西洋文化学系

西洋古典学専修	10 名
スラブ語学スラブ文学専修	5 名
ドイツ語学ドイツ文学専修	10 名
英語学英文学専修	20 名
アメリカ文学専修	10 名
フランス語学フランス文学専修	20 名
イタリア語学イタリア文学専修	10 名

歴史基礎文化学系

日本史学専修	20 名
東洋史学専修	20 名
西南アジア史学専修	10 名
西洋史学専修	20 名
考古学専修	10 名

行動･環境文化学系

心理学専修	20 名
言語学専修	20 名
社会学専修	20 名
地理学専修	20 名

基礎現代文化学系

科学哲学科学史専修	10 名
メディア文化学専修	10 名
現代史学専修	10 名

6)専修志望者数が上記の基準を超過し，選考を行うときは，2 年次までの学業成績その他を勘案する。
7)所属系及び専修が決定しない者は，2 年次及び 3 年次以降に配当された本学部学部科目を履修することができない。
8)所属系及び専修は 11 月に決定し，翌年 4 月 1 日に分属する。
9)分属後の専修の変更の願出期日は毎年 1 月とする。
10)転学部(転入)の願出期日は毎年 10 月上旬に掲示する。

4．専攻及び専修の収容人員は，事情により変更することがある。

5．この内規に定めるもののほか，専修等への分属に関し必要な事項は，文学部教授会が定める。

6．本内規は，平成 30 年 4 月 1 日から適用する。ただし，平成 30 年 3 月 31 日までは，改正前の内規により取り扱う。

注 1　専修に分属する際，所属する系に関係なく分属できます。
注 2　転学部(転入)については掲示に注意すること。